

神並遺跡 III

1988

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市の中央、河内平野を東西に貫く国道308号線上に、大阪と奈良を結ぶ近鉄東大阪線建設工事と道路整備が昭和55年以来進められ、この新鉄道は昭和61年10月に開通のはこびとなりました。この建設予定地内には周知の埋蔵文化財として、西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡が存在し、残る区間の事前の試掘調査によって、あらたに神並遺跡、水走遺跡が確認されました。

大阪府教育委員会の協力をうけて、財団法人東大阪市文化財協会では、これらの遺跡の発掘調査を実施し、多量の考古学的資料をえました。今回報告するはこびとなりました神並遺跡第3次発掘調査は昭和58年度に実施し、このとき神並遺跡では、すでに中世の集落跡、縄文時代早期の遺構、遺物など、注目すべき発見がありました。今回報告する神並遺跡第3次調査では、あらたに古墳時代や、奈良～平安時代の建物跡が検出され、神並遺跡の内容はさらに豊かなものとなりました。こうした成果から、当地の歴史と文化の一端を御理解いただき、郷土の文化財保護にいっそうの御協力をたまわりますようお願い申しあげます。

調査の実施にあたっては、近畿日本鉄道株式会社(旧東大阪生駒電鉄株式会社)、大阪府八尾市木事務所より多大の御協力を得ました。深く感謝いたします。

昭和63年9月

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 木寺 宏

例　　言

1. 本書は、東大阪生駒電鉄株式会社が昭和55～61年に実施した、東大阪都市高速鉄道東大阪線建設事業および大阪府八尾土木事務所が計画した国道308号線および都市計画道路築港枚岡線建設事業に伴う神並遺跡第3次発掘調査概要報告書である。

2. 本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が東大阪生駒電鉄株式会社と大阪府八尾土木事務所の委託をうけて実施した。期間は昭和58年1月24日から同年3月31日。

3. 調査は以下の体制のもとに実施した。

事務局長 寺澤勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）

庶務部長 吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理昭和58～61年）

下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任昭和60年12月以後）

調査部長 原田修（東大阪市教育委員会文化財課主査）

庶務 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）

上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）

調査担当 松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）

中西克宏（財団法人東大阪市文化財協会）

小西優美（財団法人東大阪市文化財協会嘱託）

調査補助員 池淵裕司、江川隆、江川義信、咲本勝巳、中村直弘、宮下孝之、山谷充、

吉本敬

4. 本書の執筆は第I章～第IV章を松田、第V章を中西が執筆し、第VI章を両者で担当した。

遺物実測図は中西、江川義信が作成し、遺物および遺構実測図のトレースは松田、山谷、為井通子がおこなった。遺物写真撮影はスタジオG.F.プロに委託しておこなった。

本文目次

はしがき

例言

I. 調査に至る経過.....	1
1. 調査事業の沿革.....	1
2. 調査地点、調査範囲と地区割.....	1
3. 試掘調査の概略.....	3
II. 神並遺跡の位置とその周辺.....	5
III. 調査の概要—調査の経過と層序.....	5
IV. 遺構.....	7
1. A 地区の遺構.....	7
2. B 地区の遺構.....	15
3. C 地区の遺構.....	15
V. 遺物.....	17
1. 奈良・平安時代の遺物.....	17
土器.....	17
瓦.....	27
土製品、金属製品.....	27
2. 古墳時代の遺物.....	29
VI. まとめ.....	32

挿 図 目 次

図1	神並遺跡位置図	
図2	神並遺跡第3次調査地区と地区割および試掘トレンチ位置	2
図3	神並遺跡周辺の遺跡分布図	4
図4	A地区層序模式図	6
図5	A地区断面実測図(折込み)	
図6	B、C地区断面実測図(折込み)	
図7	A地区上層遺構平面実測図(折込み)	
図8	A地区地山上面遺構平面実測図(折込み)	
図9	A地区石組井戸実測図	8
図10	掘立柱建物1実測図	9
図11	掘立柱建物2実測図	10
図12	掘立柱建物3実測図	11
図13	掘立柱建物4実測図	12
図14	掘立柱建物5実測図	13
図15	B地区遺構平面実測図	14
図16	B地区土塙実測図	15
図17	C地区遺構平面実測図	16
図18	第4層出土土器実測図	18
図19	第5層出土土器実測図	20
図20	第6層出土土器実測図	21
図21	掘立柱建物2出土土器実測図	22
図22	掘立柱建物3出土土器実測図	23
図23	掘立柱建物4出土土器実測図	23
図24	掘立柱建物5出土土器実測図	23
図25	溝16出土土器実測図	25
図26	土塙2出土土器実測図	26
図27	Pit出土土器実測図	26
図28	瓦実測図	28
図29	土製品・金属製品実測図	28
図30	古墳時代の土器実測図	31

図版目次

- 図版1 1. 発掘前の調査地 2. 近世井戸
- 図版2 A地区遺構全景
- 図版3 1. A地区柱穴、遺構群 2. A地区北半遺構群
- 図版4 1. A地区古墳時代掘立建物1 2. A地区古墳時代溝内遺物出土状況
- 図版5 1. A地区古墳時代、平安時代の溝、柱穴 2. A地区古墳時代、平安時代の溝、柱穴
- 図版6 1. A地区古墳時代溝2 遺物出土状況 2. A地区古墳時代溝2 遺物出土状況
- 図版7 1. A地区南半遺構群 2. A地区平安時代掘立柱建物2、3
- 図版8 1. A地区南辺平安時代柵2 2. A地区ピット60、87遺物出土状況
- 図版9 1. A地区平安時代掘立柱建物5、柱穴3 2. A地区平安時代掘立柱建物5、柱穴6
- 図版10 1. B地区近世耕作地跡検出状況 2. B地区土塙検出状況
- 図版11 1. C地区近代、現代の溝、鋤跡検出状況 2. A地区近代、現代の溝、鋤跡検出状況
- 図版12 1. 第4層出土土器 2. 第6層出土土器
- 図版13 奈良・平安時代の遺構出土土器
- 図版14 1. 奈良・平安時代の須恵器 2. 奈良・平安時代の土師器
- 図版15 1. 緑釉陶器 2. 灰釉陶器
- 図版16 1. 製塙土器外面 2. 製塙土器内面
- 図版17 1. 瓦 2. 土製品・金属製品
- 図版18 古墳時代の出土土器



図1 神並遺跡位置図

I. 調査に至る経過

1. 調査事業の沿革

大阪府と奈良県を結ぶ近畿日本鉄道奈良線は、近年の奈良県側の人口増加によって、輸送能力の限界をむかえた。このため大阪市地下鉄中央線を奈良県生駒市まで延長する新鉄道建設が計画された。同時に国道308号線の整備と共に並行する阪神高速道路の延長も計画された。しかし、これらの開発予定地内では鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡などが埋蔵文化財包蔵地として周知されており、これら以外の箇所でも未知の遺跡の存在が予想された。

このため、東大阪生駒電鉄株式会社（昭和52年発足）は、昭和54年に、すでに用地確保のすんだ国道308号線中央分離帯内で、恩智川以西の試掘調査を東大阪市教育委員会に依頼した。同教育委員会は東大阪市遺跡保護調査会に調査を委託し、同調査会は東大阪生駒電鉄の委託をうけてこれを実施した。この結果、あらたに水走遺跡が発見された。

昭和55年には鬼虎川遺跡内において、鉄道橋脚工事に先立つ発掘調査が実施された。（鬼虎川遺跡第12次調査その1）

その後、調査体制を強化するため、東大阪市教育委員会と大阪府教育委員会の合同で、昭和56年、国道308号線関係遺跡調査会が組織され、当面の調査に対処することになった。同調査会によって、鬼虎川遺跡第13次調査（その2）および第15次調査（その2の2）が実施された。また、国道170号線以東、石切神社参道を経て、鉄道トンネル口付近までの試掘調査がおこなわれ、西ノ辻遺跡、植附遺跡に加えて、あらたに神並遺跡が発見された。この試掘調査の結果から、西石切町地区の全工事予定地が調査対象となった。

神並遺跡は、昭和56年11月から昭和57年3月に第1次調査が実施され、この結果、古墳時代～奈良時代の土塙、溝、羽釜棺、鎌倉時代後半の建物跡、井戸、土塙などを検出し、同時代の土器類も多数出土した。さらにこの調査区の下層では、縄文時代早期の遺物包含層が確認され、神並遺跡第2次調査として、昭和57年に実施された。この結果、押型文土器と有舌尖頭器を含む石器が多数出土し、集石遺構も検出された。

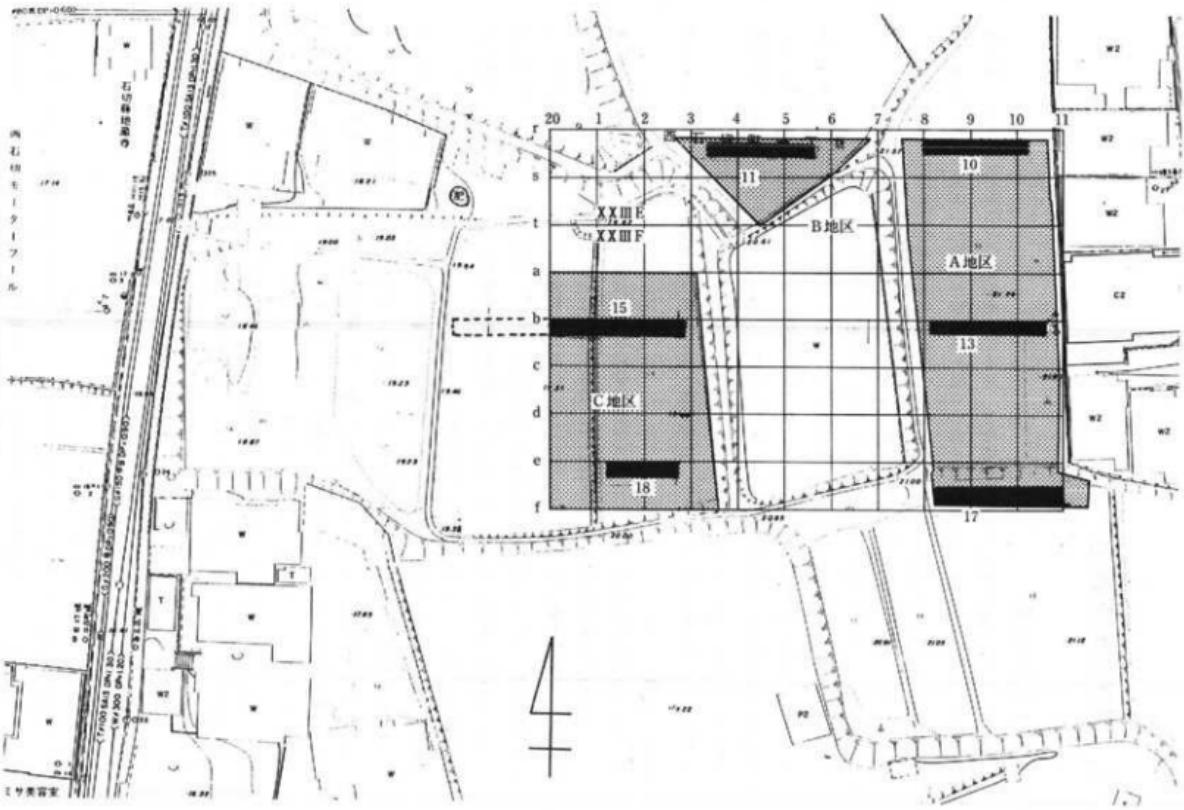
なお、国道308号線関係遺跡調査会は、神並遺跡第1次調査をもって、発展的解消し、これと東大阪市遺跡保護調査会を統合するかたちで、同年3月、財団法人東大阪市文化財協会が発足した。この後の調査は広範囲にわたるため同協会と大阪府教育委員会が調査区域を分担し進めることになった。

今回報告する神並第3次調査は、昭和58年1月24日から同年3月31日の期間で実施した。

2. 調査地点、調査範囲と地区割

調査は西石切町1丁目3番地～8番地で実施した。石切神社の南西約200m、国道308号線と旧東高野街道が交叉する北東部に位置する。先の試掘調査の結果にもとづいて、西石切町地区の工事予定地全域が調査対象となっていたため、南北方向については、予定地の幅南北40

図2 神並遺跡第3次調査地区と地区割および試掘トレンチ位置



mいっぱいに、東側は、未買収地および立ちのきが完了していない住宅地の境界まで、西は、東高野街道から東35mのところまでの東西55mの範囲で調査をおこなった。この範囲内で、溜池となっていた中央部分と、掘削土搬出に通路として必要な北西隅は今回除外した。調査区は、水田の地割とほぼ対応するようななかたちで3つに分かれ、それぞれA、B、C地区と呼ぶ。A地区600m²、B地区100m²、C地区425m²、合計1,325m²である。

上記の地区上に、国土座標による地区割を施した。東大阪市川中(X=146.3, Y=-29.9)を起点とし、西から東へ100mごとのX軸をローマ数字でI、II、III……、北から南へ100mごとのY軸をアルファベット大文字A、B、C……と表記し、100m方画の大地区が設定される。さらに、それぞれの大地区を5mごとのX軸に1~20、Y軸にa~tを付し、5m方画の小地区が設定される。X軸、Y軸の交点の名称は、それぞれの軸の名称を組み合わせて付した。交点の名称はその北西側にくる地区的名称にも用い、遺物のとりあげ地点や遺構の位置の表示に利用した。

本調査区では、XXII F、XXIII E、XXIII Fの大地区があり、北辺はXXIII Eのrライン、南辺はXXII F~XXIII Fのfライン、東辺はXXIII E~Fの10ライン、西辺はXXII Fの19ラインに囲まれている(図2)。

3. 試掘調査の概略

石切神社参道以西で実施された試掘調査の内、6ヶ所のトレンチが神並第3次調査区内に含まれる。以下にその概略を記す。(トレンチ番号は、調査当時のものをそのまま用いた。)(図2)

第10トレンチ 調査区の東北隅で東西方向に幅2m長さ10mで設定された。耕土下に13、4世紀の土器を含む整地層、8、9世紀の土器を含む整地層がみとめられた。後者は6、7世紀の遺物も含んでいた。地山はトレンチ東端では地表下40cm、西端では80cmと西に向って傾斜していた。中世の整地層上面では南北方向の溝を、8、9世紀の整地層上面ではピット、溝状遺構が検出され、建物跡となる可能性があった。また、地山上面でも遺構の存在が予想された。

第11トレンチ 第10トレンチの西、水田面が一段落ちたところに、幅2m長さ10mで東西方向に設定された。本調査区ではB地区に含まれる。中世の整地層、溝状遺構、ピットが検出された。溝状遺構は水田の地割りにそっており、耕作にともなうものと考えられた。

第13トレンチ 本調査区A地区の中央で幅2m長さ10m、東西方向に設定された。第10トレンチ同様、中世の整地層がみとめられたが、8、9世紀のそれは検出されなかった。平安時代の土師器が出土した。地山のレヴェルは第10トレンチよりもやや高くなっている。整地層および地山上面で南北方向の溝状遺構が検出された。

第14トレンチ 第13トレンチの西で、最近まで残った溜池を埋立てた場所にあたる。遺構、遺物はみとめられなかった。

第15トレンチ 本調査C地区の中央に、幅2m長さ24mで東西方向に設定された。西半は神並遺跡第4次調査区にかかる。本調査区の範囲では耕土直下で地山となり、遺構は検出されて

いない。遺物は近世以後の陶磁器片が採集された。

第17トレーニング 本調査A地区の南辺にあたる。幅2m長さ10mで東西に設定された。第13トレーニングより、水田面が一段下がった場所。耕土、床直下で地山面となり、東西方向にならぶピットと、同じく東西方向に走る溝状造構が検出された。溝状造構からは室町時代の土器、ピットからは黒色土器、製塙土器を含む土師器類が出土し、平安時代のものと考えられた。

第18トレーニング 本調査C地区の南辺にあたる。幅2m長さ7mで東西方向に設定。耕土直下で地山となり、造構は検出されなかった。耕土からは土師器、須恵器が採集された。



図3 神並遺跡周辺の遺跡分布図

II. 神並遺跡の位置とその周辺

神並遺跡は東大阪市の東部、生駒山西麓の緩傾斜地にある。町名、地番は東石切町1丁目から西石切町1丁目にあたる。標高642mの生駒山からほぼ真西に流下する辻子谷が形成した扇状地の南部に立地し、標高15~35m。遺跡の範囲は、今回の308号線関係の試掘調査によって発見されたばかりで、不確定だが、東西は東大阪線トンネル口付近から東高野街道まで、南北は国道308号線から、旧来の石切神社参道までの区域が設定されている。

本遺跡は、これまでの調査から、縄文時代早期から室町時代にいたる複合遺跡であることがわかっている。周辺には、そのいくつかの時期をともにする遺跡が知られている。西には弥生時代、室町時代の集落跡である西ノ辻遺跡、弥生時代前期から中期に発達した鬼虎川遺跡、北には弥生時代~室町時代の植附遺跡、石切神社境内にあり、奈良時代から中世まで継続した法通寺跡、現在の辻子谷河岸の尾根上にある縄文時代以来の遺物を出土する辻子谷遺跡がある。また東には古墳時代後期の神並古墳群がある。神並遺跡内での調査成果は、これらの遺跡との関連において適切に意味づけられるものと思われる(図3)。

III. 調査の概要——調査の経過と層序

現地での調査は、昭和58年1月24日から同年3月31日までの期間で実施した。A、B、C各地区ともに、調査前は水田であった。試掘調査の結果から、造構面は比較的浅いところにあることがわかつていたので、この水田面から人力掘削をおこなった。耕土を全面で除去した後、土層観察のため各所にアゼを残し、さらに掘削した。

A地区では現代の耕土層(第1層)下に、床土(第2層)をはさんで、近世~中世の遺物を含む旧耕土(第3層U~第4層)があり、この下部では溝などの造構を検出した。旧耕土層を除去すると、A地区南半では、奈良時代~平安時代の遺物を含む黒褐色土層(第6層)、北半では灰黄褐色土(第5層)が分布し、とともにA地区東辺では層厚を減じて、部分的には地山が露出した。この地山は黒褐色や明黄褐色を呈するシルト質粘土で、所によっては小礫~大礫を含む。表層土壤下の岩層を意味する通常の地山ではなく、段丘上の堆積物ではあるが、無遺物層であることから、便宜的にこう呼んでいるにすぎない。

黒褐色土および明黄褐色土の上面で精査、ピット、土塙、溝などを検出した後、これらを除去した。この段階で地山をベースとする建物跡、柱穴、ピット、土塙などが検出された。

これらの内、多くの造構は、黒褐色土を覆土とし、奈良時代、平安時代の遺物を含んでいるが、他に、覆土の色調、質の異なるものもみられ、時期を異にすることが知られた。いっぽう、

灰黄褐色土の下にも、地山をベースとして、黒褐色土を覆土とする遺構が検出された。この他に灰黄褐色土に酷似する覆土をもつ溝、ピットが検出され、古墳時代の須恵器、土師器が数個体まとめて出土した。これらの遺構は、A地区北東部で検出された掘立柱建物跡の柱穴からの遺物と時期が一致する。

上述したA地区の層序は図5（折込み）に示し、図4のブロックダイアグラムに要約する。なお、A地区南辺は一段低い水田面にあり、耕土直下で地山となる。すでに試掘調査で、地山上面の溝、ピットが検出されていたが、埋戻し土を除去しさらに精査した。

B地区は、調査区北辺の中央にあり、現代の水田面でA地区よりも一段低くなっていた。同地区では現代の耕土層下に比較的厚く旧耕土層（第3層U、L）が堆積しており、その下半で2、3の遺構面を検出した。遺構のほとんどは溝で、いずれも現代の水田の地割りに平行ないし直交する方向で、耕作にともなう溝ないし、うねの痕跡であろう。旧耕土の直下で地山となつた。地山上面でも旧耕土中で検出したのと同じような溝が検出された。ここでは、同一検出面でいくつかの切り合い関係があり、錯綜しているが、覆土はおむね旧耕土と同じであり、顕著な時期差はないものと思われる。この他、地山上面では土塙ないし井戸を一基検出したが、無遺物であった。図6（折込み）にA地区と対応するB地区の層序を示す。

C地区では、現代の耕土層下で、ただちに地山となり、溝が数条検出された。これらの覆土は耕土であり、近代以後の耕作にともなうものであろう。同地区の中央を南北方向に、水田の境界がはしっており、これに沿う水路があった。これも近代以後のものである。

なお同地区では調査の最終段階で、地山を掘削し、遺物の有無を確認した。遺物は全く検出されなかつたが、このときの地層断面を、図6（折込み）の9に示す。

次章では、A地区の遺構を中心にやや詳しく述べることにする。

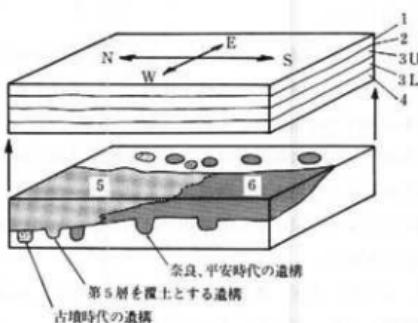


図4 A地区層序模式図

図5 A地区断面実測図

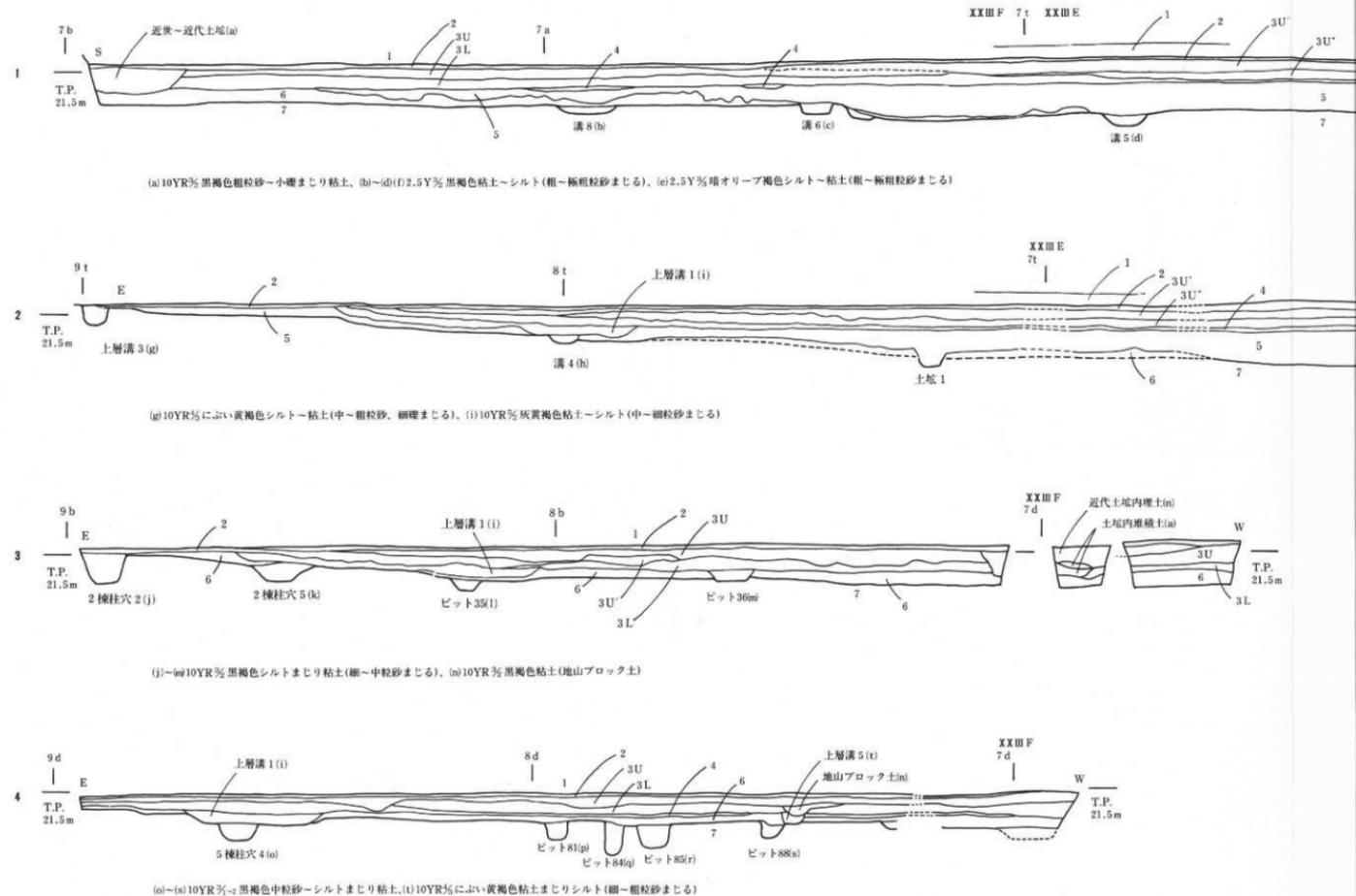
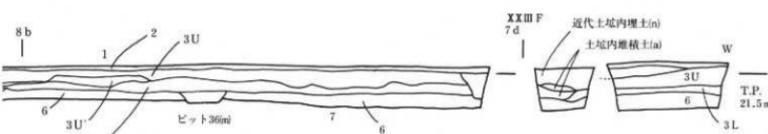
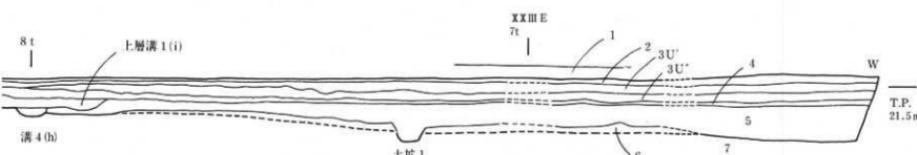
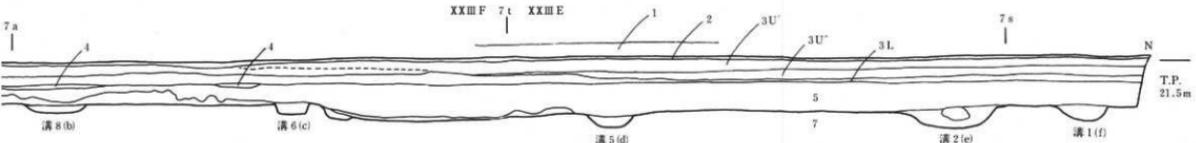


図5 A地区断面実測図



- 1 7.5Y%灰色粘土~板粗粒砂(耕土)
- 2 2.5Y%黄褐色粘土まじりシルト(床土)
- 3U' 10YR%灰黄褐色粘土~シルト(田耕土。細~中粒砂まじる。)
- 3U' 10YR%灰黄褐色粘土~シルト
(田耕土。両層の間に中粒砂~シルトのラミナ介在)
- 3L 2.5Y%, 黄褐色粘土まじりシルト(田耕土。砂、細礫まじる。)
- 4 2.5Y%暗灰黃褐色~細粒砂まじりシルト~粘土
- 5 10YR%灰黃褐色粘土~シルト(粗~板粗粒砂まじる。)
- 6 10YR%黑褐色シルト~中粒砂まじり粘土
- 7 7.5Y%黒褐色ないし10YR%明黄褐色粘土(地山)

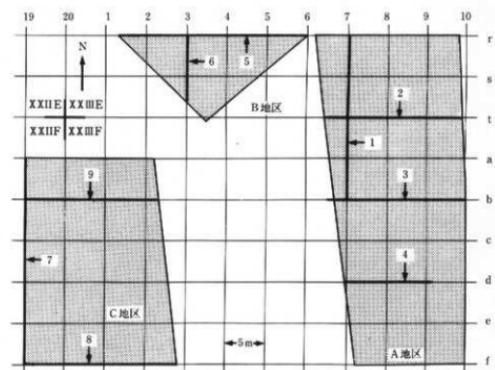


図6 B.C地区断面実測図

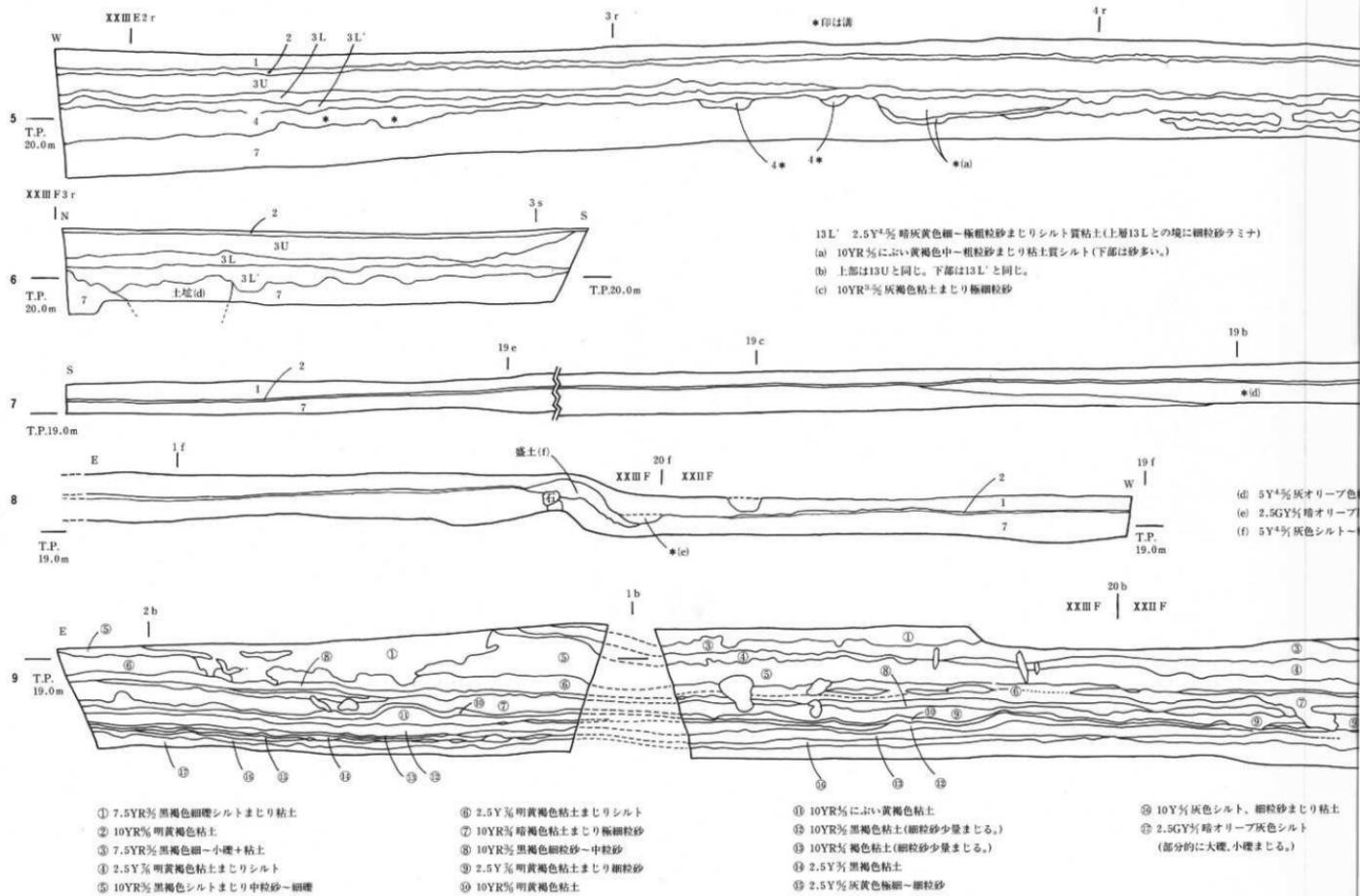


図6 B. C地区断面実測図

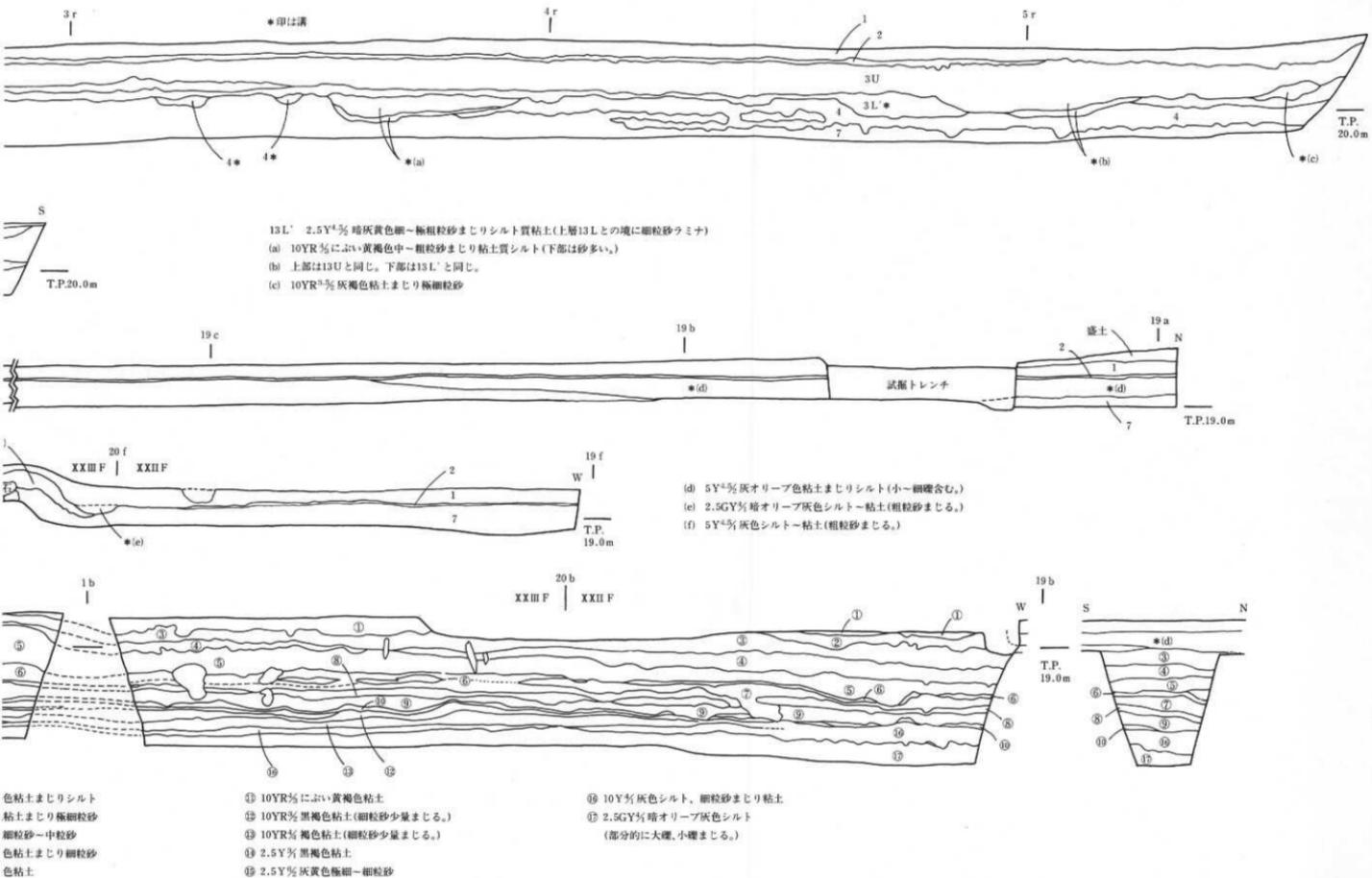
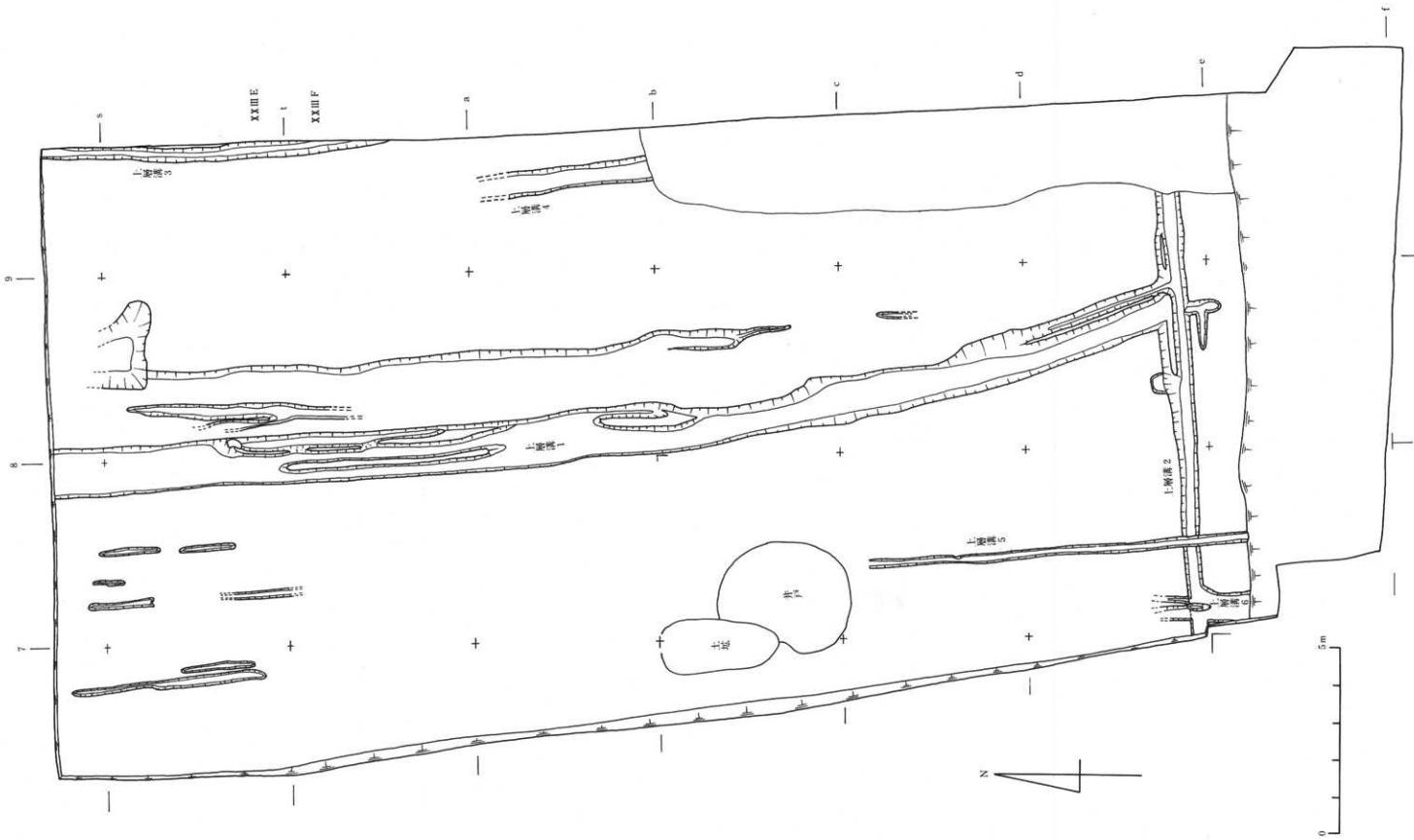
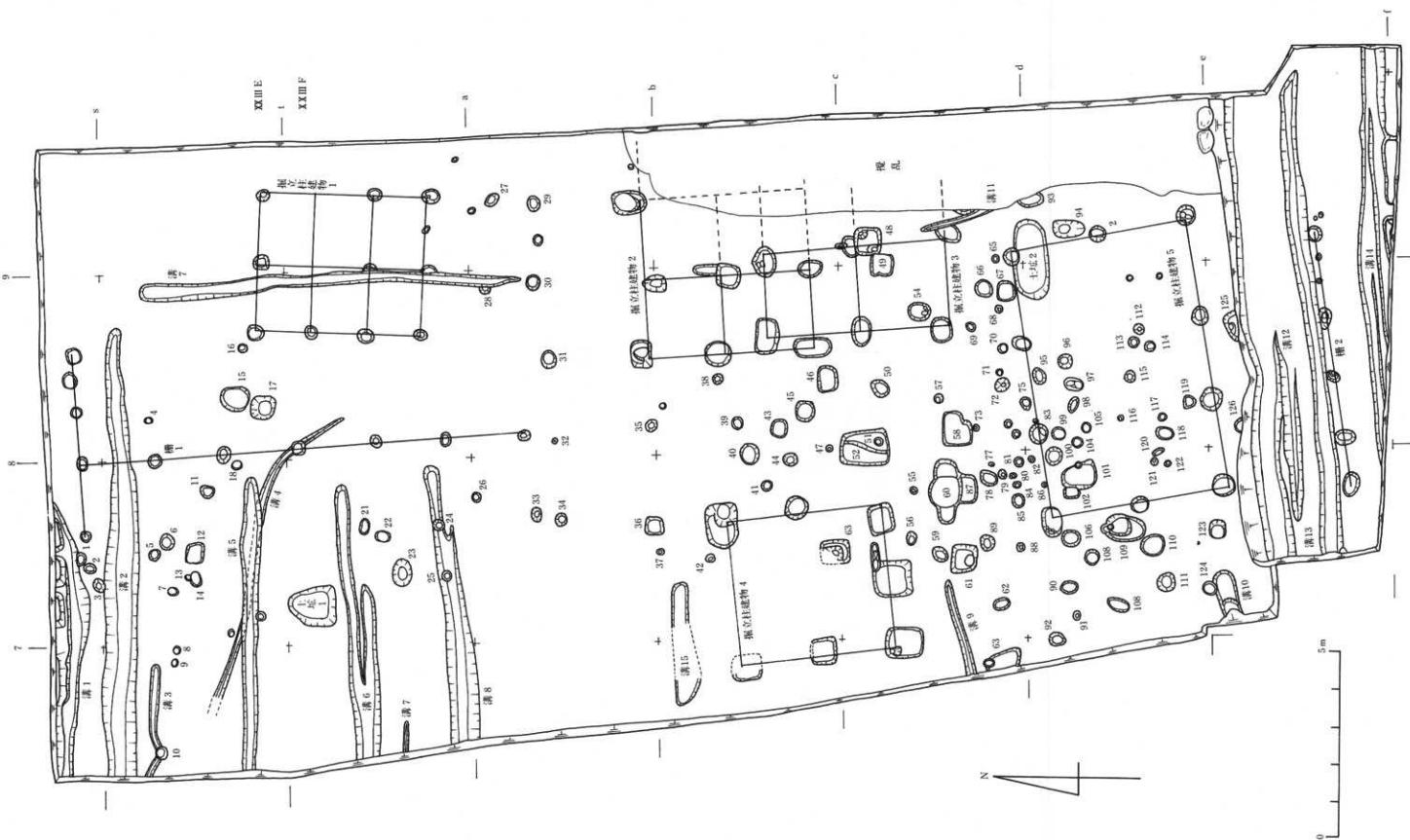


图7 A地区上古生界平面测图





卷之三

IV. 遺構

1. A地区の遺構

A地区では2つの遺構面が確認された。第4層直下（部分的には第3層直下）で黒褐色土と灰褐色土をベースとする遺構面と、地山をベースとする遺構面である。以下の記述では、前者の遺構名の前には「上層」と付けて呼ぶことにする。

上層で検出された遺構は、上層溝1～6であった（図7）。いずれの覆土にも中世～近世の遺物を含む。上層溝1は、A地区中央を南北にはしり、南半でやや東に振る。幅は1～1.4m。深さは4～10cmで、ベース面が西に傾斜しているため、溝の西肩は東よりも低い。溝の底のレヴェルは、T.P.21.24～21.26mではほぼ一定し勾配はない。

上層溝2は、調査区の南辺で、溝1と直交して接し、東西方向にはしる。幅40～70cm、深さ5～8cm。底のレヴェルはT.P.21.18～21.31mで、わずかに東に高い勾配がある。

上層溝1と上層溝2には切り合い関係はみとめられず、覆土も共通しており、同時期のものと考える。上層溝6も調査区の南西端でわずかに検出されたにすぎないが、同じ理由で、上層溝1、2と同時期だといえる。上層溝1の北半部東側約1.5mのところを上層溝1と並行した低い段が検出された。高さは3～4cm。

上層溝3はA地区北東辺を南北にはしる。幅約40cm、深さ約8cmで、底のレヴェルはT.P.21.47m付近にある。

上層溝4はA地区東辺中央を東西にはしる。幅約60cm、深さ3～4cm。底のレヴェルはT.P.21.50m付近にあり、北に向って徐々に浅くなり消失している。南端部は擾乱部にはいり不明。

上層溝5はA地区南西部を東西にはしる。幅20～30cm、深さ6～7cm。底のレヴェルはT.P.21.30～21.20で、北に向って浅く、消失する。

上層溝3、4、5の覆土はいずれも、にぶい黄褐色のシルト～粘土で共通しているが、上層溝1、2のそれとはやや異なる。A地区南西部の上層溝5があきらかに上層溝2を切っているため、上層溝1、2、6よりも、上層溝3、4、5は新しいと考えられる。いっぽうA地区北東部に細く浅い溝状の遺構が数状検出されている。これらは耕作で生じた鈍痕のようなものであろう。上層溝5なども鈍痕の可能性がある。

以上、第4層直下の遺構からは、瓦器塊、土師器などの細片が出土したが、その量はきわめて微量である。したがって、これらの時期については、中世以後としか言いえない。

なお、この遺構面より上層で、意味不明の土塙、耕作時の鈍痕とみられる溝状遺構などが検出されている。8C地区西半では、石組の貯水槽ないしは井戸と考えられる遺構が検出されている（図9）。これは出土した陶器の細片から近世～近代のものと考えられる。

いわゆる地山をベースとするA地区的遺構には、掘立柱建物と柱穴、ピット群、土塙、溝がある（図8）。これらの分布を概観すると、北半には並行して東西にはしる5、6本の溝とやや

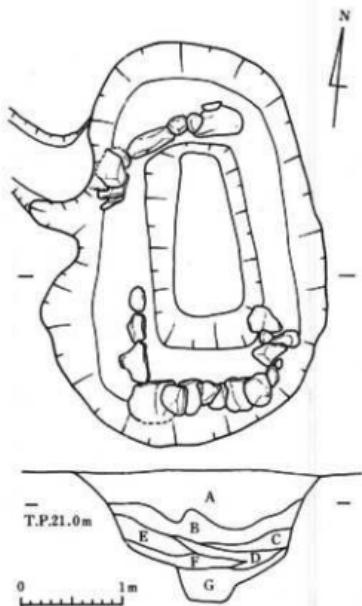


図9 A地区石組井戸実測図

A. 明黄褐色および黒褐色粘土のブロック土 B. 黒色砂混り粘土質シルトのブロック土 C. 黒色砂混りシルト質粘土 D. オリーブ褐色砂混り粘土 E. Cと同じ F. 黑褐色砂混りシルト質粘土 G. Aと同じ

- (1) 灰黄褐色土を覆土とする溝2、溝4、掘立柱建物1など。
- (2) 第6層黒褐色土がちょくせつ覆土となっている遺構。溝1、3、5、6、7、

8、櫛1、掘立柱建物2、3、4、およびほとんどのピット、土塙。

(3) 暗灰褐色土（シルト質、砂粒の混入少ない。）を覆土とする遺構。建物5、櫛2、その他若干のピット。

密度の低いピット、柱穴群が、南半には若干の溝と土塙、柱穴、ピットが密集している。この南北で異なる様相は、北側では地盤が低く、もともと造構が少なかったと同時に、第5層が第6層を浸食して堆積していることから、本来あった造構がこれによって消失しているということにも起因するであろう。したがって、tライン以北の第7層地山の上面はいくらか削平されていると考えられる。さらに、第6層自体が、人为的に擾乱、整地した層とみられることから、当然それ以外の部分の第7層上面も削平をうけているはずである。これによって浅い造構が消失したと想像でき、何のまとまりもないピット群を生じたのであろう。

地山上面では、覆土と出土遺物を異にする3時期の造構を検出した。

(1) 灰黄褐色土を覆土とする溝2、溝4、掘立柱建物1など。

(2) 第6層黒褐色土がちょくせつ覆土となっている遺構。溝1、3、5、6、7、

配をもつ。

掘立柱建物 1 (図10) A地区北東部で検出した。2間×3間で、桁行4.5m、梁行3.79m。桁行の柱間は約1.5m、梁行はそれより少し長く、1.8m強。床面積は17.06m²。柱穴は円形で、平均直径0.38m。総柱となる可能性がある。桁行の方向は約2°東偏。

平安時代の遺構（9世紀）

溝1 A地区の北西辺を東西にはしる。これより一段高く、北側から直交してくる溝が4本ないし5本検出されたが、調査区外へ延びるため詳細は不明。幅45~60cm、深さは最深部で13.4cm。浅く開いたU字状の断面形を呈する。検出された溝底のレヴェルは西端でT.P.20.804m、東端でT.P.21.069m。約4%の勾配をもつ。

溝3 A地区北東部で検出。東西方向にはしり、幅約25cm、深さ約13cm。浅いU字状の断面形を呈し、あまり勾配はない。底のレヴェルはT.P.20.85m。

溝5 A地区北東部で検出。東西方向にはしり、幅約40cm、深さ約25cm。浅いU字状の断面形を呈する。底のレヴェルは東端でT.P.21.066m、西端でT.P.20.883m。約3%の勾配で

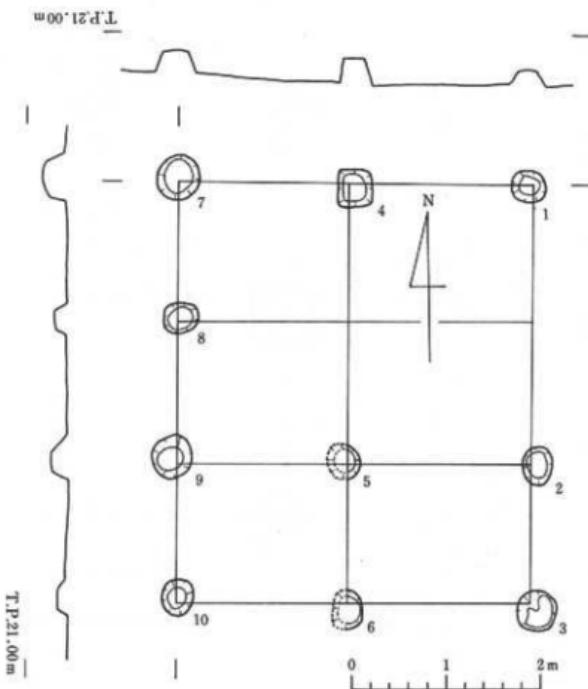


図10 掘立柱建物1実測図

西に低い。

溝6 A地区北東部で検出。上記の溝と並行して東西方向にはしる。2本の溝がかさなり合ってできたものと思われるが、覆土を識別できず、前後関係は不明。二股に分かれているが、いずれも幅は約40cm弱、重複部分はやや広く約60cm。深さは7~9cm。浅いU字形の断面を呈する。東端底のレヴェルはT.P.21.193m、西端はT.P.20.913mで、約4%近い勾配がある。

溝8 溝6の南に並行して東西方向にはしる。幅は約80cm。東端部では狭く約35cmとなり、二股に分かれる。最深部の深さ約15cm。東端部では浅く、約8cm程になる。浅いU字形の断面を呈する。東端部底のレヴェルはT.P.21.260m、西端部でT.P.21.034m。3%程の勾配がある。

上記溝1、2、3、5、6、8および7は、(1)その勾配からみて、排水を目的としている、(2)2.5m前後の間隔でたがいに平行している。このことから、畑作の際に設けられる大ウネと考えられる。溝4と上記の溝以外の溝は、他のピット、土塹と同様、第6層上面ないし下面より検出された。これらの覆土には顕著な差はない。古墳時代の掘立柱建物1を切る溝11は、きわ

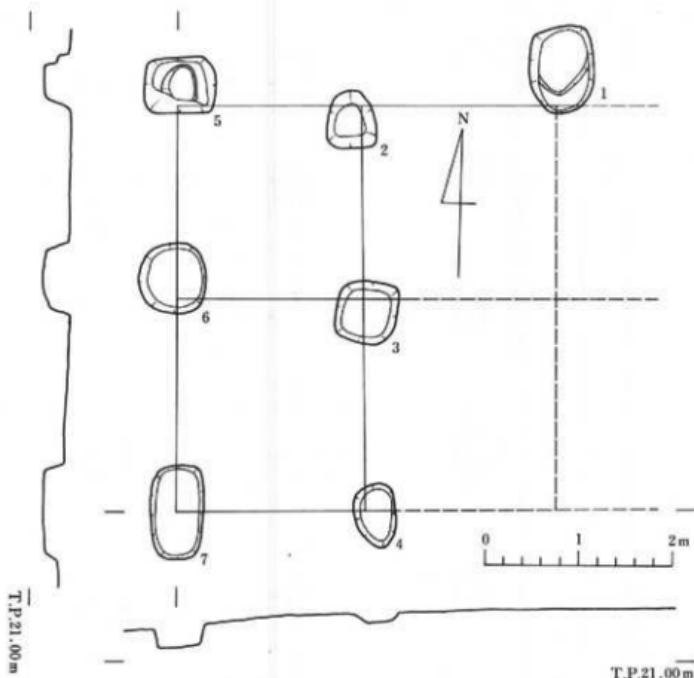


図11 掘立柱建物2実測図

めてかすかな痕跡をとどめるにすぎなかった。南辺の試掘部分で検出されている溝も、地面上で検出されたが、近代から現代までの耕作にともなう水路、鋤痕、ウネの痕跡である。

柵1 A地区北半部の中央で、南北にならぶビット列を、北辺でこれに直交する東西方向のビット列を検出した。周間にこれらとともに建物跡を構成するようなビットが検出されなかつたので、柵としておく。いずれのビットも円形で、直径30~40cm。深さは平均して約20cm。ビットの間隔は約2m。ビット列の方向は約3.5°西偏し、これは次に述べる掘立柱建物の方向ともほぼ一致する。この西側にならぶいくつかの溝の周辺を耕作地と想定すれば、この柵は、建物の敷地を画区するものであったとも考えられる。

掘立柱建物2 (図11) A地区の中程、東寄で検出した。一部の柱穴は調査区外および擾乱部分にあたったため、全体の規模は不明だが、2間×2間以上となる。この状態での桁行4.38m、梁行4.03m、柱間の平均は桁で2.18m、梁で1.99m、床面積は約18.9m²となる。総柱で柱

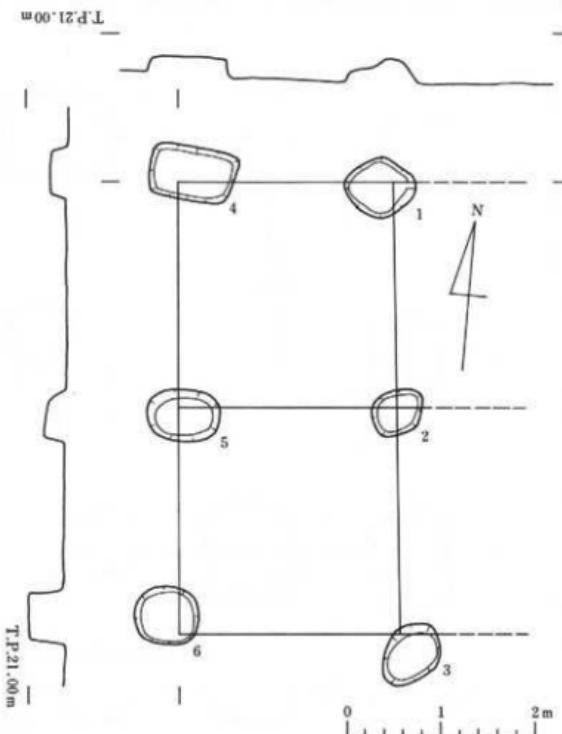


図12 掘立柱建物3実測図

穴は楕円形に近いものもあるが、おおむね方形とみられる。その大きさの平均値は77×68cmとなり、深さでは25cm。建物の桁方向は西偏約2°。

掘立柱建物3 (図12) 上述の掘立柱建物2の南に重複して検出した。これも東半が擾乱部にあたるため、2間×1間分を残すのみである。桁行は4.83m、梁行は不明。桁行の柱間は平均2.42m、梁行は2.33m。床面積は不明。総柱で、柱穴はほぼ方形。平均0.74×0.56cm、深さ28cm。桁行の方向は西偏約3°。

掘立柱建物4 (図13) A地区中央部西寄で検出した。2間×2間で、桁行4.42m、梁行3.64m。柱間の平均は桁行で2.42m、梁行で2.33m。床面積は16.09m²。一部分は近世～近代の井戸、土塙で破壊されているが、総柱の可能性もある。柱穴は方形で平均92×77cm。深さは平均30cm。桁行の方向は西偏約4.5°。

平安時代の遺構（10世紀）

掘立柱建物5 (図14) A地区的南部で検出した。3間×2間で、桁行7.23m、梁行4.81m。

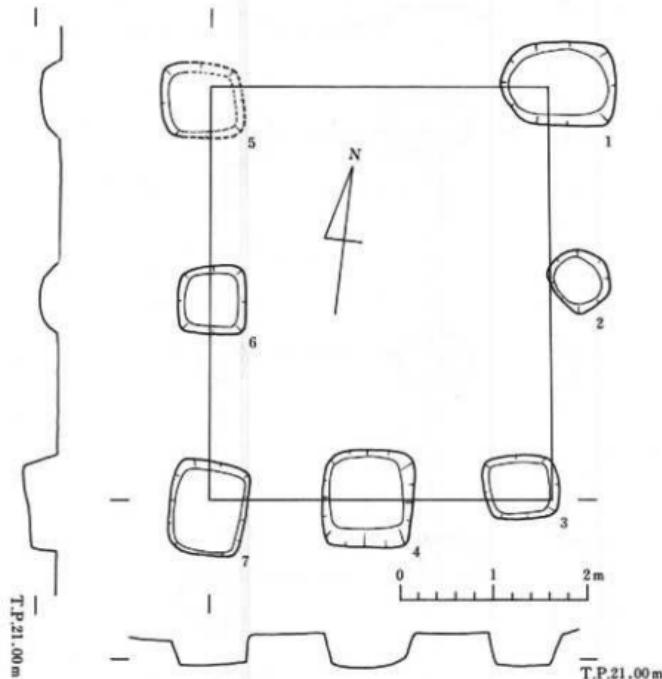


図13 掘立柱建物4 実測図

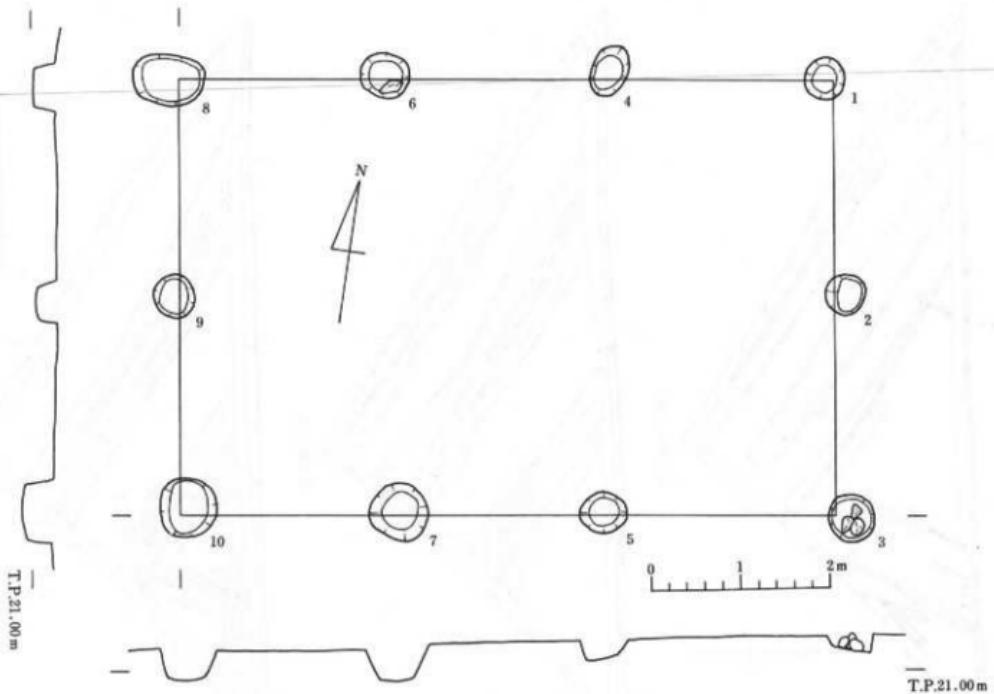
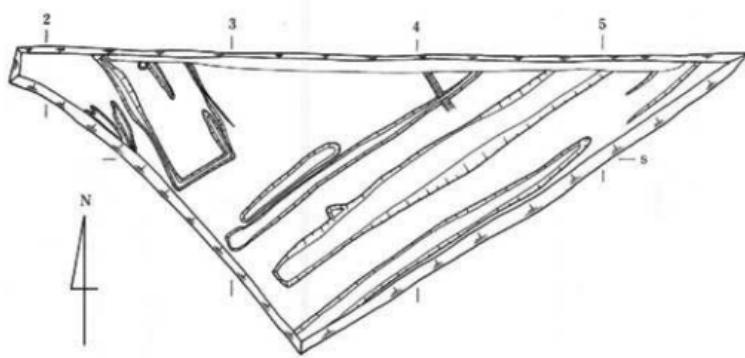
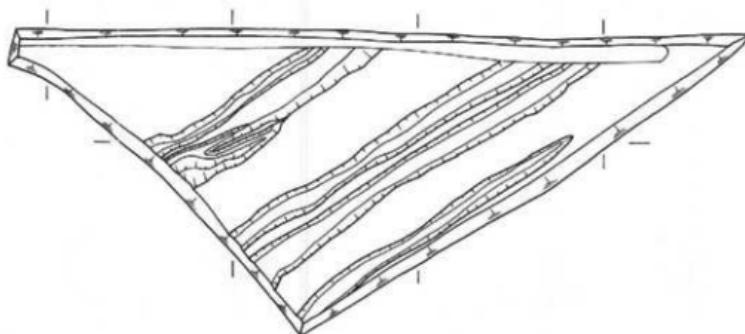


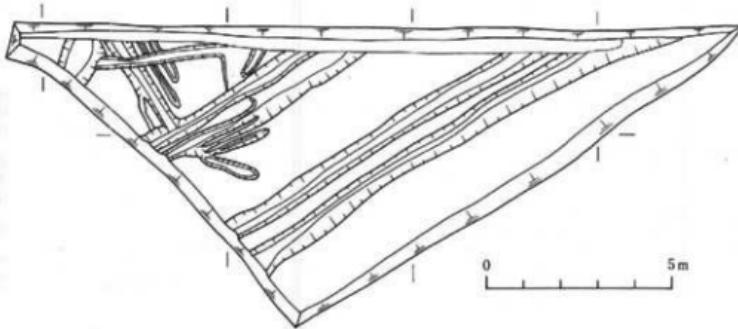
图14 埋立柱建筑物 5 实测图



第3層 L上面



第4層上面



地山上面

圖15 B地區遺構平面實測圖

床面積は34.78m²。柱間の平均は桁行で2.4m、梁行で2.38m。柱穴はすべて円形で平均直径50cm、深さ平均23cm。柱穴3と6には根石を残す。桁行の方向は北偏約8°。

櫛2 A地区の南辺(試掘トレンチ内)で検出した。東西にならぶピット列で、方向は北に約7°偏る。これらも、建物を構成するような対応するピットがみとめられなかったので櫛とする。ピット間は平均1.72m。ピットはほぼ円形で、平均の直径は44cm、深さは17cm。

掘立柱建物5と櫛2とは方向を同じくし、覆土も共通していること、さらに後で述べる出土遺物から、同時期のものであり、先に述べた平安時代(9世紀)の遺構とは区別される。

2. B地区の遺構

B地区では第3層Lの上面、第4層の上面および地山上面で溝を多数検出した(図15)。調査区の北西隅でやや細かい溝が錯そうするものの、各面の溝はたがいに重複する位置にみとめられる。いずれも現代の耕地の地割線にそっており、A地区の層相との対応から、B地区の各層は耕作土と考えられる。その時期は中世以後とみられる。

3. C地区の遺構

C地区では、現代の耕作土層の直下で地山上面となり、ここでいくつかの溝状遺構が検出された(図16)。20ラインを南北にはしる溝は水田の地割にそういうもので、耕作用の水路である。近代以後の遺物出土。他の溝状遺構は、耕土を覆土としており、鋤痕である。

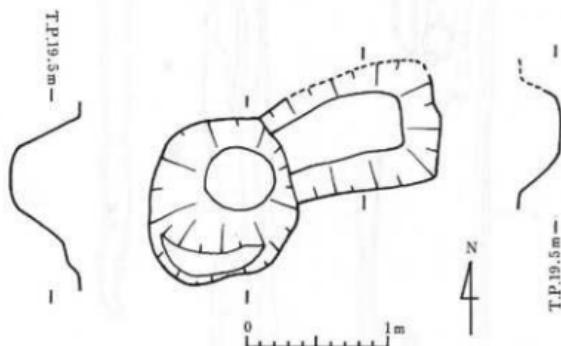


図16 B地区土塙実測図

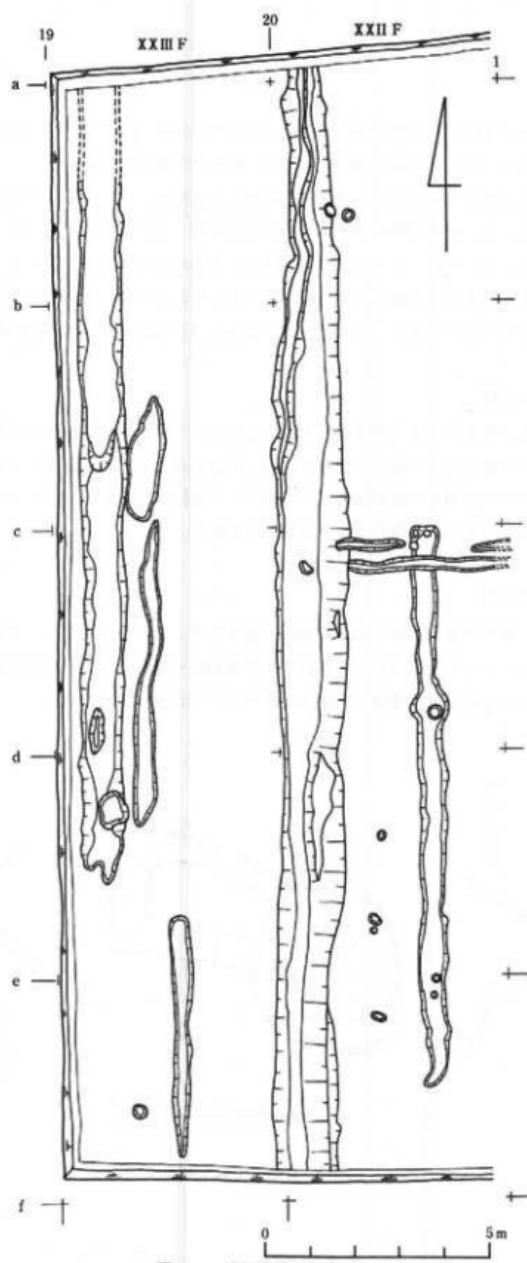


图17 C地区构造平面实测图

V. 遺物

遺物は、A地区から奈良時代～平安時代の土器類・瓦類・金属製品・石製品をはじめ古墳時代中期末頃の土器類などがコンテナ約10箱分出土している。B・C地区では、土師器・染付けなどの土器の細片を微量検出しているのみである。したがって以下では、A地区からの出土遺物について奈良時代～平安時代のものと古墳時代中期のものにわけて述べてゆく。

1. 奈良・平安時代の遺物

奈良・平安時代の遺物は、A地区第4層～第6層のはか掘立柱建物・溝・土塙・柱穴などの遺構から出土している。出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器などの土器類をはじめ、縄釉陶器・灰釉陶器・製塩土器・瓦類・土製品・金属製品・石製品・錢貨がある。これらのうち最も多いのは、土器類である。土器類は、いずれも小破片で器表面の磨滅が著しい。

なお、土器類の呼称・胎土の特徴・製作技法などの記述にあたっては、平城宮関連の各報告書に準じる。^{注1}以下各層位、遺構ごとに土器類から記述してゆく。

土器

第4層出土土器（図18、図版12）

第4層からは、須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・縄釉陶器・製塩土器などが出土している。これらのうち、最も出土量の多いのは土師器である。

須恵器には、供膳用の杯A・杯B蓋・壺A蓋などがある。杯B蓋には、天井部が丸みをもつて口縁部の屈曲するもの(1)と平坦な天井部から屈曲する口縁部につづく形態のもの(2)がある。両者とも天井部外面は、ヘラキリ後ナデ調整を加える。(1)の天井部内面中央には、ヨコナデ調整後さらに仕上げナデ調整を加える。壺A蓋(3)は、平坦な天井部から直角に折れ曲がる口縁部につづく形態を呈する。口縁端部には段を形成し、丸くおさめる。天井部外面は、ナデで調整する。杯A(4・5)の口縁部は、内側ないし外反気味に斜め上方にひらき、口縁端部を丸くおさめる。底部は平坦な面をなす。口縁部外面は、ヨコナデ調整する。底部外面は、ヘラキリ後ナデ調整を加えて仕上げる。(6)は、壺の底部片である。平底の底部には、やや外方へ張り出す高台を貼り付ける。体部外面はヨコナデ調整を施す。底部外面は、回転ヘラケズリ調整する。

灰釉陶器は2点出土しているのみである。(7)の口縁部は外反し、口縁端部を尖がり気味におさめる。口縁部外面の調整法は、下半部外面を回転ヘラケズリ調整、上半部をヨコナデ調整する。口縁部内面は、ヨコナデ調整によって仕上げる。釉薬は、口縁部内面にだけ認められる。口径12.2cmを測る。

土師器には、供膳用の杯A・杯B・杯B蓋・高杯A・貯蔵用の壺E・煮沸用の羽釜などがある。量的には、供膳用の器種が最も多い。壺E(8～10)の口縁部は短く外反し、口縁端部を丸くおさめる。体部最大径の位置は、器体上位にある。体部は、最大径部以下が直線的に斜め上

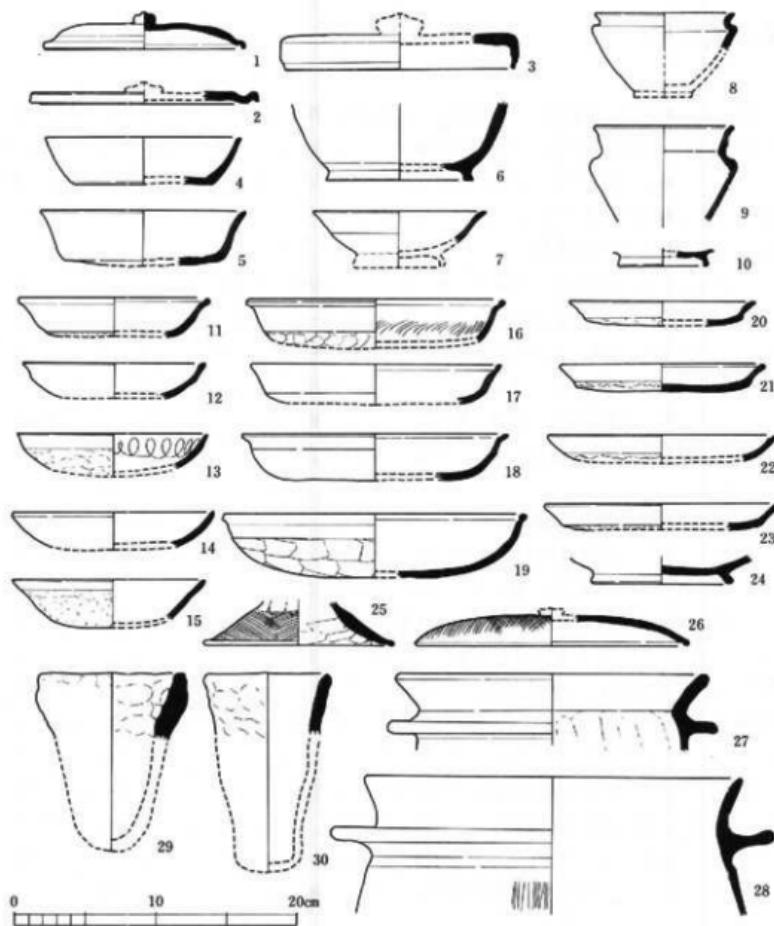


図18 第4層出土土器実測図

方にひらき、最大径部を境に観く内傾する。底部には、低い高台を貼り付ける。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内外面はナデ調整によって仕上げる。胎土は、II群。杯Aには、口縁部下半が内擣し上半を外反させ、口縁端部を内側に巻きこむもの(11・16~19)と口縁部全体が内擣気味にひらき、端部を丸くおさめるもの(12~15)がある。底部は、双方とも平坦な面をなす。前者の調整法には、a手法によるもの(11・17・18)、b手法のもの(16)、c手法で仕上げるもの(19)がある。後者はすべてe手法によって調整している。これらのなかには、口縁部

内面に螺旋暗文(13)や1段の斜放射暗文(16)を加えるものもある。(16・18)の胎土はI群。皿Aには口縁部が外反し、端部を丸くおさめるもの(20・23)と口縁部全体が内側に卷きこむもの(21・22)がある。底部は、いずれも平坦な広い面をなす。前者は、e手法によつて調整する。後者はa手法で仕上げる。胎土はII群。黒斑は認められない。(23)の口縁部には、煤が付着している。杯B(24)は、底部に外方へやや張り出す断面方形の低い高台を貼り付けるものである。高台の端部は、丸く仕上げる。内面には、1段の螺旋暗文を施す。高台径9.6cmを測る。胎土はII群。杯B蓋(26)は、笠形の天井部からなだらかに口縁部へつづく。口縁端部は、内側に巻きこむ。天井部外面は、ヘラケズリ調整後さらにヘラミガキ調整を加える。天井部内面はナテで仕上げる。口径19.1cmを測る。胎土はI群。(25)は、高杯Aの脚裾部である。脚裾部は「ハ」字形にひろがり、端部で内側へゆるく巻きこむ。脚裾部外面は、横方向のヘラミガキ調整を5方向から施す。脚裾部内面は、横方向にヘラケズリ調整する。軸部の外面は、ヘラケズリし断面10角形を呈する。胎土はII群。羽釜(27・28)は、生駒西麓の胎土である。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部と体部との境には、水平方向からやや上向きにのびる鉢を貼り付ける。鉢は幅2.0~3.0cm程度で短い。鉢の先端は、角ばるものと丸くおさめるものがある。体部は張りをもたず、長胴形を呈する。(28)の体部外面には、縱方向のハケメ調整を施す。体部内面は、ナテで仕上げる。(27)の体部外面から鉢下面には、煤が付着する。

黒色土器はすべてA類であるが、器種不明である。緑釉陶器は、細片を少量検出している。製塩土器は、A地区第4層では約1.75kg出土している。すべて細片化しており全形態の判明するものはない。口縁部は、直線的にひらくもの(30)と上端でやや内側するもの(29)がある。体部は、類例からみて砲弾形の形態を呈するものと推定できる。体部内外面は、ナテで仕上げる。(29)は口径10cm、(30)は口径8.6cmを測る。このほかに体部内面に布目を留めるもの(143)もある。いずれも二次的な加热を受ける。

第5層出土土器(図19)

第5層からは、須恵器・土師器・黑色土器・灰釉陶器・緑釉陶器などが少量出土している。いずれも細片化しており図示できるものは少ない。

須恵器には、供膳用の杯A・杯B・杯B蓋のほか貯蔵用の壺L・壺Qなどが出土地してある。杯A(31)は、直線的に外上方へのびる口縁部に平底の底部がつく。口縁端部は、丸くおさめる。口縁部と底部の境界には、明瞭な稜をもつ。口縁部外面はヨコナテ調整する。底部外面は、ヘラキリのままで仕上げる。口縁部外面には、火だしきを残す。杯B(32・34)の口縁部は内側気味にたちあがり、端部をまるく仕上げる。底部は平坦な面をなし、口縁部との境界部分に断面台形を呈する高台を貼り付ける。口縁部外面は、ヨコナテ調整を施す。底部外面は、ヘラキリ後ナテ調整を加える。(32)は、口径12.6cm・器高3.0cmを測る。杯B蓋(33)は、平坦な天井部から屈曲する口縁部につづく形態を呈する。口縁部外面は、ヨコナテ調整する。壺L(35)は、口縁部が直線的に外上方にのび、上端ではほぼ水平方向にひらく。口縁端部は、上方につまみあがり、外傾する凹面を構成する。口縁部外面は、ヨコナテ調整を加える。壺Q(36)の口

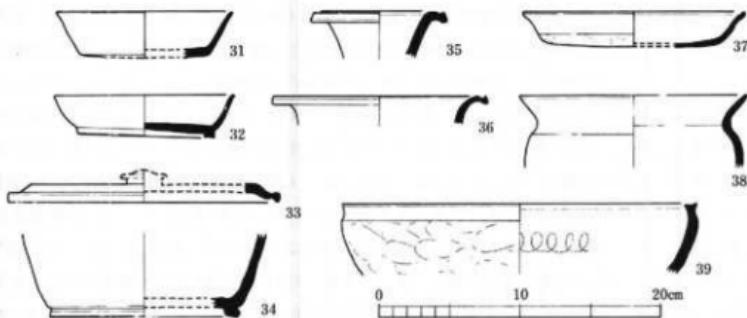


図19 第5層出土土器実測図

縁部は大きく外反し、上端で水平方向にひろがる。口縁端部はつまみあがる。口縁部内外面はともにヨコナデ調整によって仕上げる。

土師器には、皿A・甕・鉢などがある。皿A(37)の口縁部は、下半部が内縁気味にひらき、上半部で外反する。口縁端部は、内側に大きく巻きこむ。底部は、広い平坦な面をなす。外面は、a手法によって調整する。胎土はII群。甕(38)の口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。体部の張りは小さい。口縁部内外面は、ヨコナデで調整する。外面には、強い二次焼成痕が認められる。(39)の鉢は、口縁部が内縁気味にひらき、端部ちかくで傾きをかえたらあがる。口縁端部には、内側に傾斜する広い面を構成する。口縁部内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。内面には、1段の螺旋暗文を施す。胎土はII群。

黒色土器は、すべてA類である。灰釉陶器や緑釉陶器は、すべて細片化しており図化できるものはない。製塩土器は、総重量約400gを検出している。

第6層出土土器（図20、図版12）

第6層からは、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・製塩土器が出土している。これらのうち、最も出土量の多いものは土師器の供膳用土器である。

須恵器には、供膳用の杯Aのほか壺A蓋・甕などがある。杯A(40)は、直線的にひらく口縁部から平底の底部につづく形態を呈する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と底部の境界には稜をもつ。口縁部内外面は、ヨコナデ調整する。底部外面は、ヘラキリのまま仕上げる。壺A蓋(41)は、平坦な天井部から直角にちかく折れ曲がる口縁部につづく。口縁端部は、内側に傾斜する面を構成する。口縁部内外面は、ヨコナデ調整を施す。甕には、口縁端部が斜め上方につまみ上がるものの(42)と外傾する平坦な面をなすもの(43・44)がある。口縁部内外面は、いずれもヨコナデ調整で仕上げる。

緑釉陶器杯B(45・46)の胎土は、黄灰色を呈し軟質である。口縁部は内縁気味に外上方へのび、上端で覗く外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面は、ヨコナデ調整する。口縁

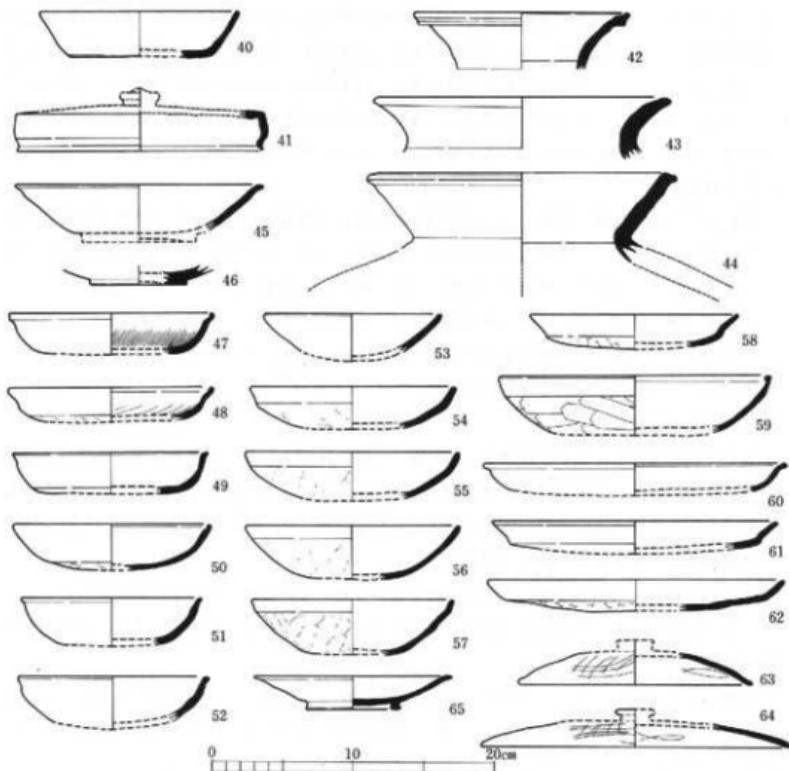


図20 第6層出土土器実測図

部内面は、ヨコナデ調整後さらに横方向のヘラミガキ調整を加える。(46)の底部は、切り高台である。釉薬の範囲は、(45)が口縁部内外面、(46)が底部内外面におよぶ。(45)は、口径17.4cmを測る。

土師器には、供膳用の杯A・杯B蓋・皿Aのか、煮沸用の甕がある。甕はすべて小破片化しており図示できるものはない。杯Aには、口縁部下半が内側してひらき、上半で外反するもの(47~49)と口縁部全体を内側気味に仕上げるもの(50~57・59)がある。前者の口縁端部は、すべて内側に巻きこむのに対して後者は、巻きこむもの(50・59)を含むもの多くを丸くおさめる。外面調整は、前者のうち(47・49)がa手法、(48)がb手法で仕上げる。後者では、(51・52・59)がc手法、(53~57)はe手法によって調整する。(47・48)の口縁部内面には、1段の斜放射暗文を施す。胎土は、すべてII群。皿Aには、口縁部が外反し、端部を丸くおさめるも

の(58・61・62)と口縁部下半が内擣し、先端で短く外反するもの(60)がある。(60)の口縁端部は内側に巻きこむ。底部は、いずれも広い平坦な面をなす。外面調整は、前者をe手法、後者をa手法によって仕上げる。胎土はⅡ群である。杯B蓋(63・64)は、笠形を呈する天井部からなだらかに口縁部につづく形態である。口縁端部は丸くおさめる。天井部外面は、ヘラケズリ調整後ヘラミガキ調整を加える。天井部内面は、ナデ調整後さらに螺施暗文を加えて装飾する。胎土はⅡ群。

黒色土器には、杯B・皿Bなどの供膳用土器がある。磨滅が著しいため、調整手法の不明なものが多い。皿B(65)の口縁部は内擣気味にひらき、上端で短く外反する。口縁端部は丸くおさめる。調整手法は不明。黒色化の範囲は内面に限られ、A類に属する。

製塩土器は、総重量約1.35kgを検出している。形態的には、4・5層出土のものと同一である。体部内外面をナデ調整するものほか、体部内面に横方向のハケメ調整を施すもの(151)も1点ある。すべて二次的な加熱を受ける。

遺構出土の土器

地山上面で検出した掘立柱建物2～5・溝・土塙・柱穴などの各遺構からは、少量の遺物が出土している。しかしそのほとんどが細片で保存状態も悪い。以下では、このなかで比較的多数図示し得た遺構出土の土器を取り上げて記述してゆく。

掘立柱建物2出土土器(図21、図版13)

掘立柱建物2を構成する柱穴からは、須恵器杯B蓋、土師器杯A・甕などが少量出土している。掘立柱建物2は、土師器杯Aがすべてe手法で製作していることから、さかのぼっても9世紀後半代と考えておく。

須恵器杯B蓋(66・67)は、平坦な天井部から屈曲する口縁部につづく形態を呈する。天井部外面は、ヘラキリ後ナデで調整する。(66)の天井部内面中央には、仕上げナデを施す。(66)はPit6、(67)はPit5から出土。

土師器杯A(68・69)は、口径約14.2cmを測る。口縁部は内擣してひらき、先端で短く外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面調整は、口縁部上端のみをヨコナデ調整するe手法によって仕上げる。ヨコナデから下位部分は、成形時の凹凸をそのまま残す。いずれもⅡ群の胎土である。Pit1から出土。甕(70)は、口縁部が強く外反しはば水平にひらく。口縁端部は、上方につまみあがる。体部外面は、縦方向のハケメ調整を加える。体部内面には、左上がりの斜方向にハケメ調整を施す。体部外面に煤が薄く付着する。口径22cm、Pit6出土。

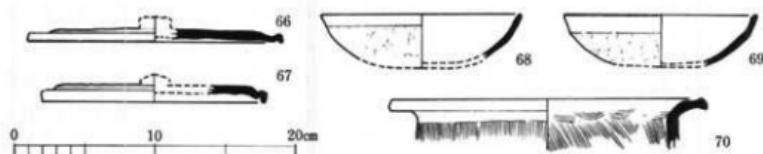


図21 掘立柱建物2出土土器実測図

掘立柱建物 3 出土土器 (図22、図版13)

掘立柱建物 3 の柱穴からは、須恵器杯 A・皿 C、土師器杯 Aなどを検出している。図化できるものは 3 点にすぎない。出土土器には、奈良時代末から 9 世紀代のものを含む。

須恵器杯 A (90) は、口径 13cm・器高 3.2cm を測る。口縁部は直線的に外上方へのび、端部を丸くおさめる。口縁部と底部との境界は、明瞭な稜を構成する。底部は平坦な面をなすものと推定できる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整する。底部外面は、ヘラキリ不調整である。Pit 6 出土。皿 C (92) は、口径 17.8cm・器高 1.7cm を測る。口縁部は、外反気味に短くひらく。口縁端部は、やや内傾する平坦な面をなす。口縁部と底部の境界は、稜線によって区画する。底部は、広い平坦な面に仕上げる。口縁部内外面は、ヨコナデによって調整する。底部外面は、ヘラキリ不調整である。Pit 6 出土。

土師器杯 A (91) の口縁部は下半部が内擣し、上半部でわずかに外反する。口縁端部内面には、浅い沈線を加え巻きこみ風に仕上げる。外面調整は a 手法である。口径 12.2cm・器高 3cm を測る。胎土は II 群。Pit 5 から出土している。

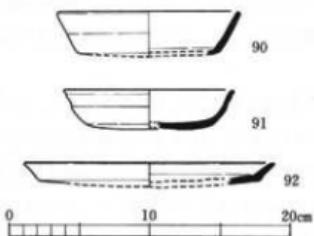


図22 掘立柱建物 3 出土土器
実測図

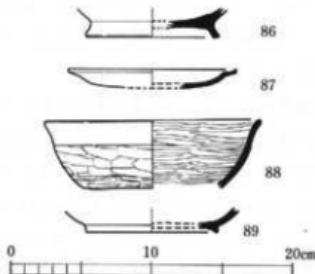


図24 掘立柱建物 5 出土土器実測図

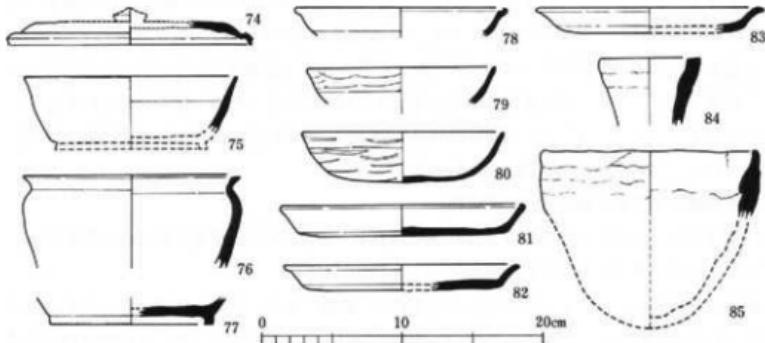


図23 掘立柱建物 4 出土土器実測図

掘立柱建物 4 出土土器（図23、図版13）

掘立柱建物 4 を構成する柱穴からは、須恵器杯B・杯B蓋・鉢D、土師器杯A・皿Aのほか製塙土器などが出土している。土器の出土量は、掘立柱建物のなかで最も豊富である。しかし、いずれも小破片化しており、全形態の判明するものは少ない。出土土器には、奈良時代末から9世紀代のものがある。

須恵器杯B蓋(74)は、ややふくらみをもつ平坦な天井部から屈曲する口縁部につづく形態である。天井部外面は、ヘラキリ後ナテ調整を加える。天井部内面は、ヨコナテ調整後さらに仕上げナテ調整を施す。口径17.1cm。Pit3出土。杯(75)の口縁部は、外上方へ直線的にのびる。口縁端部は、丸くおさめる。口縁部内外面は、ヨコナテ調整によって仕上げる。口径は、15.1cmを測る。Pit4出土。鉢D(76)は、外反する短い口縁部から上位で肩の張る体部につづく形態を呈する。口縁端部は、内側に傾斜する面を構成する。口縁部と体部の境界には、明瞭な稜をもつ。底部を欠損するため、高台の有無については不明である。口縁部内外面および体部内外面は、ヨコナテ調整で仕上げる。口径15.6cm、Pit3から出土している。(77)は、杯Bの底部と考えておく。高台は断面白形を呈し、体部との境界部分の直下に貼り付ける。底部外面は、ヘラキリ後不調整である。底部内面には、ヨコナテ調整を加える。高台径11.6cm・高台の高さ0.6cmを測る。Pit3出土。

土師器杯Aには、口縁部上半がわずかに外反し、端部を内側に大きく巻きこむもの(78)と口縁部全体が内側に傾斜するもの(79・80)がある。(78)は口縁部内外面をヨコナテ調整で仕上げる。(79・80)の器体外面は、e手法によって調整し、さらに口縁部外面を横方向にヘラミガキ調整する。(80)は、口径14.3cm・器高1.8cmを測る。胎土は、すべてII群。(78)はPit1出土。(79・80)はPit3出土。皿Aには、口縁部全体が内側に傾斜するもの(81)と口縁部が外反し、端部に外傾する面を構成するもの(82・83)がある。底部は、平坦な広い面を形成する。(81)はa手法によって器体を調整するに對して(82・83)は、e手法で仕上げている。(81)は、口径17cm・器高2.3cm。(82)は、口径16.6cm・器高1.8cmを測る。胎土は、すべてII群。(81)はPit4出土。(82・83)はPit7から出土している。

製塙土器(84・85)の全形態は不明であるが、類例からみて砲弾形の体部から丸底の底部につづく形態と推定できる。口縁端部は、尖がり気味におさめるもの(85)と平坦な面をなすもの(84)がある。(84)は口径7.3cm。(85)は口径15cmを測る。両者とも二次的な加熱を受けている。(84)はPit1、(85)はPit3から出土している。

掘立柱建物 5 出土土器（図24、図版13）

掘立柱建物 5 を構成するPitからは、綠釉陶器杯B、土師器小皿、黒色土器杯Bなどを検出している。出土遺物には、9世紀から10世紀代のものがある。

綠釉陶器杯B(86)の胎土は精良で青灰色を呈し、硬質である。平らな底部には、外方に張り出す高台を貼り付ける。高台の端部は、わずかに内側へ傾斜する面をなす。底部外面はナテ調整を施し糸切り痕を消し去っている。底部内面は、ヘラミガキ調整を施す。釉薬は、底部外面

以外の部位にすべて施す。高台径9.4cm・高さ1.2cmを測る。Pit3出土。

土師器小皿(87)は、口径12cm・器高1.4cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部をややつまみ上げる。口縁部内外面は、ヨコナテ調整によって仕上げる。Pit7出土。

黒色土器杯B(88・89)は、内面を黒色化するA類である。(88)の口縁部は下半部が内側気味にひらき、上半部で外反する。口縁端部は、丸くおさめる。口縁部外面の調整は、上半をヨコナテ調整、下半部を横方向にヘラケズリ調整し、さらに横方向のヘラミガキ調整を加える。口縁部内面は、ヨコナテ調整後横方向のヘラミガキ調整を施す。口径15.4cm。Pit5出土。(89)は、平底の底部に断面三角形の低い高台を貼り付けるものである。Pit7出土。

溝16出土土器（図25、図版13）

溝16からは、須恵器杯B、土師器杯A・皿Aなどが少量出土している。いずれも小破片で図示できるものは少ない。奈良時代末から9世紀代の土器を含む。

須恵器杯B(71)は、口縁部がやや内側気味に外上方へのび、端部を丸くおさめる。底部は平底を呈し、口縁部との境界に稜線をもつ。高台は断面方形を呈し、稜線のやや内側に貼り付ける。口縁部内外面および底部内面は、ヨコナテ調整で仕上げる。底部外面は、ヘラケズリ調整後さらにナテ調整を加える。

土師器杯A(72)の口縁部は全体に内側し、端部を丸くおさめる。外面はe手法によって仕上げる。内面はナテ調整する。皿A(73)は、口縁部が斜め上方に直線的にのびる。口縁端部は、内側に巻きこむ。底部は広い平坦な面をなす。調整手法はe手法である。胎土はII群。

土塙2出土土器（図26、図版13）

土塙2からは、須恵器杯B蓋、土師器杯A・杯B・甕など奈良時代末から9世紀後半代のものが出土している。

須恵器杯B蓋(93)は、平坦な天井部から屈曲する口縁部につづく形態を呈する。天井部外面は、ヘラキリ後ナテで調整する。口縁部外面は、ヨコナテ調整を施す。

土師器杯A(94)の口縁部は、内側気味にたちあがり上端で短く外方へ屈曲し、端部を丸くおさめる。外面調整はe手法によって仕上げる。内面にはナテ調整を加える。口縁端部の一部分と底部外面には煤が付着する。口径12.3cm・器高3.2cm。杯B(95)は、口縁部全体が内側気味にひらき、端部を内側に巻きこむ。平坦な底部には、やや外傾する低い高台を貼り付ける。高台の端部は、丸く仕上げる。口縁部外面はC手法で仕上げ、さらに横方向のヘラミガキ調整を加える。口径17.4cm・器高5.6cmを測る。胎土はI群。甕(96・97)の口縁部は、外反してひろがる。口縁端部には、つまみ上がりほぼ垂直な面をなすもの(96)と、外傾する凹面を構成するもの(97)がある。口縁部外面は、ヨコナテ調整で仕上

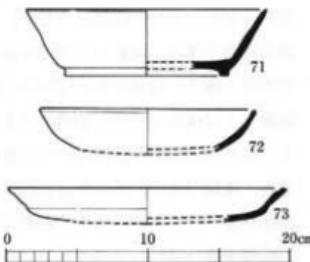


図25 溝16出土土器実測図

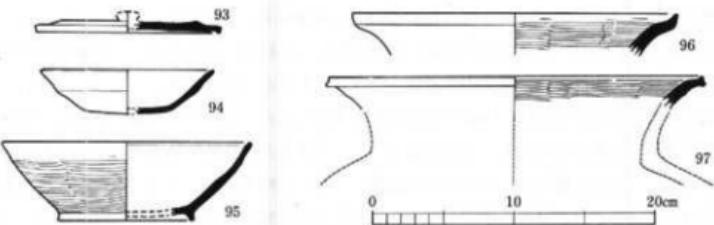


図26 土塙2出土土器実測図

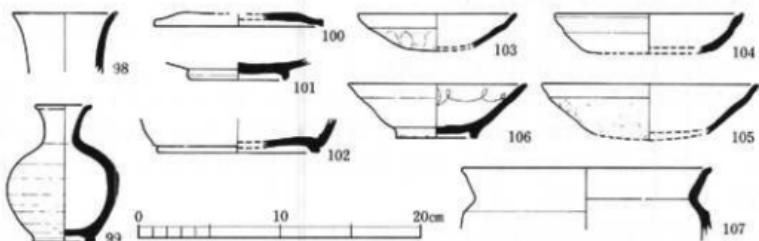


図27 Pit出土土器実測図

げる。口縁部内面には、横方向のハケメ調整を加える。

Pit出土土器（図27、図版13）

掘立柱建物を構成する柱穴以外から出土したもので、須恵器杯B・杯B蓋・壺L・壺M、灰釉陶器、黒色土器杯B、土師器杯A、製塙土器など奈良時代末から10世紀代のものがある。

須恵器壺L(98)は、口縁部の小破片である。口縁部は外反してひらき、端部を丸くおさめる。内外面は、ヨコナデで調整する。口径7.2cmを測る。Pit108出土。壺M(99)の口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。口縁部から体部へは、ゆるやかに移行し明瞭な稜はもたない。体部は倒卵形を呈し、平底の底部につづく。底部には、外へ張り出す断面方形の低い高台を貼り付ける。体部外面下半は、回転ヘラケズリ調整によって仕上げる。他の部位は、ヨコナデ調整ないしナデ調整を施す。口径3.8cm。器高9.9cmを測る。Pit87出土。杯B蓋(100)は、平坦な天井部から屈曲する口縁部につづく形態を呈する。天井部外面は、ヘラキリ後ナデ調整を加える。Pit23出土。杯B(102)は、口縁部はやや内擣氣味に外上方へのびる。口縁部と底部との境界には稜線をもち、稜線のやや内側に断面方形の高台を貼り付ける。高台端部は、内傾する面を構成する。底部外面は、ヘラキリ後ナデ調整を施す。Pit53より出土。

灰釉陶器(101)は、平底の底部に高台を貼り付けるものである。高台は、外側を面取り風にナデ仕上げる。口縁部内面はナデ調整する。底部外面は、回転ヘラケズリ調整後ナデ調整を加える。釉薬の範囲は、口縁部内外面におよぶ。Pit97出土。

土師器杯Aには、口縁部全体が外反気味にひらき、端部を丸くおさめるもの(103・105)と口縁部下半が内側してひらき、上半で短く外反し、端部を内側へ巻きこむもの(104)がある。前者はe手法で、後者はa手法によって調整する。胎土はいずれもII群。(103)はPit113、(104)はPit66、(105)はPit112から出土。杯B(106)の口縁部は、斜め上方に内側してひらき、端部を丸くおさめる。平底の底部には、断面台形を呈する高台を貼り付ける。口縁部外面は、e手法によって調整する。口縁部内面には、1段の螺旋暗文を施す。口縁部の一部には、煤が付着する。口径12.6cm・器高3.9cm。胎土はII群。Pit43から出土。甕(107)の口縁部は短く外反し、端部に内傾する面を構成する。口縁部と体部との境には、明瞭な稜を形成する。口縁部外面はヨコナテ調整、体部外面はナテで仕上げる。Pit87出土。

瓦(図28、図版17)

瓦は、第4層から620g、第5層から110g、第6層から1.87kg程度出土しているほかPitや溝内からも少量出土している。瓦は、大多数が平瓦や丸瓦の小破片である。軒瓦は、軒丸瓦1種類3点、軒平瓦2種類2点がある。

平瓦は、1枚作りである。凸面の叩き目は、繩目のものが多く、格子目は少ない。丸瓦には、玉縁のつくものがある。

軒丸瓦(108・109)は、三重圓文で中央に珠点を配さない。直径13.3cm。圓線の太さは、ほぼ同一である。内側から第1圓線、第2圓線、第3圓線とよぶならば、第2圓線と第3圓線の間隔は、第1圓線と第2圓線との間隔よりも4mmほど広い。瓦当部は、接合法によって結合している。胎土は、生駒西麓のものではなく、他地域のものである。

調査地点の北東約300mに位置する法通寺跡の発掘調査で同文瓦が出土している。¹¹²

軒平瓦には、2種類ある。(111)は、二重圓文である。圓線の断面は、台形を呈する。圓線間の溝部分の底面は平坦である。胎土・色調は、(108)の軒丸瓦と同一である。(110)は、均整唐草文である。頭は曲線頭。外区には珠文を施す。内区および外区の脇区界線の上位部分に横方向のきずが認められる。

(110)の同瓦が法通寺跡から多数出土している。

土製品・金属製品(図29、図版17)

第4～6層および遺構から出土した土製品には、土鍤2点・紡錘車1点がある。また、金属製品には、鉄製の釘・かすかい1点、銅製の鞘蓋金具1点のほか錢貨1点がある。

紡錘車(112)は、直径4.5cm・厚み3.1cmを測る。平面円形、縦断面はそろばん玉形を呈する。中央には、直径約1cmの円孔を穿つ。

土鍤(113・114)は紡錘形を呈する。縦断面形は長円形を呈する。いずれも土師質で、器表面の磨滅が著しい。(113)は長さ2.7cm・最大径0.7cm。中心に直径約3mmの円孔が通る。第4層出土。(114)は全長3.5cm・最大径1.9cm。直径約3mmの円孔を中心施す。井戸1出土。

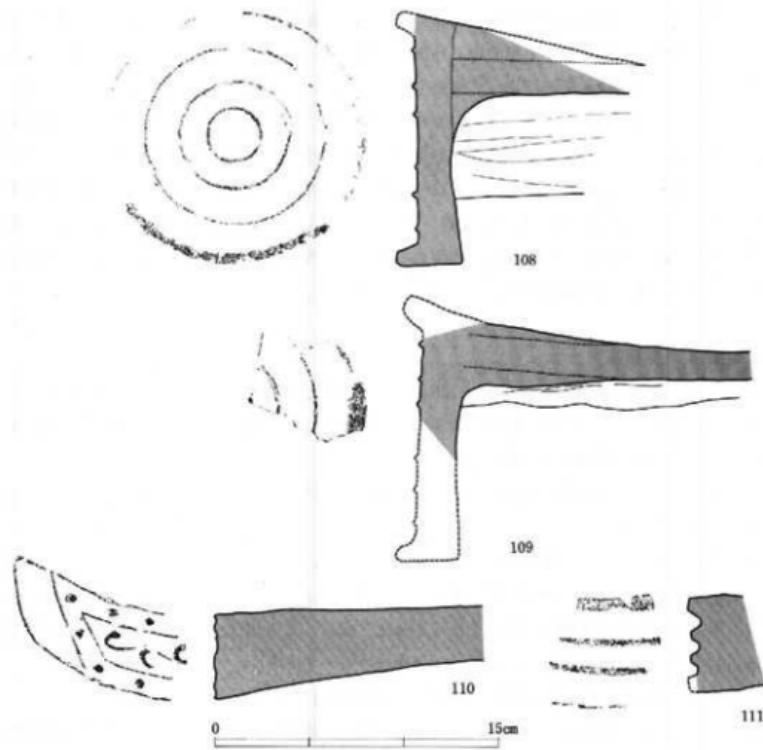


图28 瓦实测图

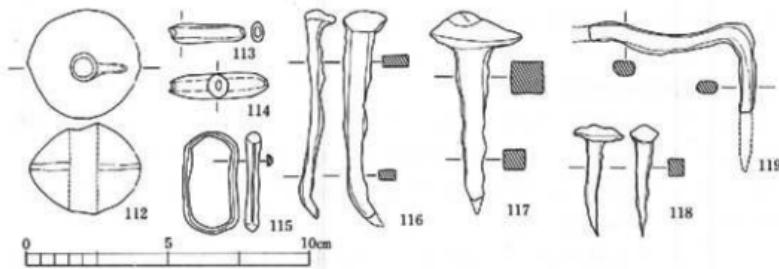


图29 土製品・金属製品実測図

(115) は、銅製の精貴金具で短辺にやや丸みをもつ長方形を呈する。長辺3.5cm・短辺1.9cmを測る。断面形は、外側にふくらみをもつ半月形を呈し、最大厚0.3cm。Pit113出土。

鉄釘(116~118)は、釘頭および横断面形が方形をなす。(116)は残存長7.4cm。横断面は釘頭直下で長辺0.9cm・短辺0.4cmを測る。(117)は残存長6.7cm。釘頭直下での太さは、一辺1.1cmを測る。第4層出土。(118)は全長4cm。太さは釘頭直下で0.6cmを測る。Pit123出土。

かすがい(119)は、断面方形の鉄棒をコ字形に折り曲げたものである。太さ約0.7cm。両端部は、欠損する。掘立柱建物4Pit5出土。

錢貨には、Pit72から出土した神功開宝1点がある。全体の1/2ほどの破片で、遺存状態は極めてわるい。

2. 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、掘立柱建物1、溝2・4などの遺構から須恵器・土師器が出土しているほか、第4層~6層からも混入した状態で須恵器・土師器・韓式系土器を微量検出している。これらのうち、溝2出土遺物は、比較的まとまった状態で検出している。

溝2出土土器(図30、図版18)

溝2からは、土師器高杯1点・甕3点、須恵器無蓋高杯1点・甕1点が出土している。いずれもほぼ完形に復原し得る。

土師器高杯(24)の胎土は、砂粒をほとんど含まず精良で赤褐色を呈することから生駒西麓のものではない。杯部は、楕形を呈し内縁してひらく。口縁端部は丸くおさめる。脚部はハ字形にひらき、端部を四角くおさめる。調整法は、口縁部内外面をヨコナデ調整で、杯底部内外面および脚部外面をナデ調整で仕上げる。脚部内面には、シボリメを残す。黒斑は認められない。甕には、口径13.5cm前後・器高15~18cm・体部最大径16cm前後のもの甕A(125・126)と口径約20cm・器高32cm前後・体部最大径約28cmを測る大型のもの甕B(127)がある。甕Aの胎土は、両者とも肉眼観察で非河内のものと考えられる。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめるものの(126)と外傾する面をもつものの(127)がある。体部は球形を呈し、丸底の底部につづく。体部最大径は、体部の中位に位置する。口縁部内外面はヨコナデ調整によって仕上げる。体部外面は、(125)がナデ調整、(126)が縦方向のハケメ調整後さらに体部中位を横方向にハケメ調整する。体部内面は、(125)がナデ調整、(126)が下半部を左上がりの斜方向にヘラケズリ調整後、上半部をさらに横方向にヘラケズリ調整する。(126)の器体外面のうち下半部から最大径部分の幅約8cmの範囲には、帯状に煤が付着する。甕B(127)の胎土は、所謂生駒西麓のものである。口縁部は内縁気味に外上方へのび、端部に内側へ傾斜する面を構成する。体部は長胴で倒卵形を呈し、丸底の底部につづく。器壁は、比較的薄い。調整法は、口縁部内外面をヨコナデ、体部外面を左上がり斜方向の粗いハケメ調整、体部内面を縦方向のナデ調整する。煤の付着は、認められない。体部中央には、大型の黒斑が1ヶ所ある。

須恵器無蓋高杯(129)の口縁部は外反して上方にのび、先端でやや内縁気味に傾きをかえる。

口縁端部は、丸くおさめる。杯部は深く、中央に断面三角形の突帯を1条施す。突帯の上下には、横描波状文を横方向に巡らす。口縁部と杯底部との境界には、鋭い稜線をもつ。脚部は短く、端部に段を構成する。脚部には、4方向から長方形の透しを穿つ。透しは幅広く、面取りする。口縁部および脚部内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。杯底部は回転ヘラケズリ調整を施す。甕(130)は、口縁部が朝顔形に外反し端部に外傾する面を構成する。口縁端部直下には、1条の断面三角形を呈する突帯を巡らす。口縁部は、2条の突帯によって区画し、突帯上方に横描波状文を1帯づつ施す。体部は完存しないものの、肩にやや張りをもつことから倒卵形を呈するものと推定できる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整を施す。体部外面には擬格子タタキメを残す。体部内面は、同心円状の当て具痕をナデ消して仕上げる。

これらの出土土器の形態や製作技法の特徴から考えて、溝2は5世紀後半代のものであろう。

掘立柱建物1出土土器(30図、図版18)

掘立柱建物1のPit4から土師器壺(120)を1点検出している。胎土は、所謂生駒西麓の特徴をもつ。口縁部は直線的に外上方にのび、端部を丸く仕上げる。体部は欠損するものの、口縁部の形態や大きさから後述する溝4出土の壺(121)と同一の形態を呈するものと考えられる。口縁部内外面は、ヨコナデ調整後さらに縱方向のヘラミガキ調整を加える。

(120)は形態の特徴からみて、溝2出土土器と同時期にあたる5世紀後半のものと考えることができる。

溝4出土土器(30図、図版18)

溝4からは、土師器壺(121)を1点検出している。胎土内には多量のくさり礫を含み、非河内の製品である。口縁部は直線的に外上方へのび、端部を丸くおさめる。口縁部と体部の境界は明瞭である。体部は肩に張りをもち、扁球形を呈する。口縁部内外面は、ヨコナデ調整で仕上げる。体部外面の上位部分には、横方向のヘラミガキ調整を施す。体部内面中位には、横方向のハケメ調整を加える。体部外面には黒斑を残さない。

(121)は、船橋遺跡・八尾南遺跡・平城宮SD6030上層出土例などからみて、5世紀後半代に位置付けることができる。

包含層出土の遺物(30図)

土師器高杯(122・123)の胎土は、生駒西麓以外の他地域のものである。口縁部は内彌氣味に外上方へのび、端部を丸くおさめる。(122)は、杯底部との境界に段を構成する。脚部は、ハ字形にのび、裾部でさらに大きくひらく。脚端部は、尖がり気味におさめる。口縁部内外面は、ナデて調整する。黒斑は、認められない。出土層不明。

須恵器蓋(128)の天井部は欠損するものの、傾きからみて扁平な形態を呈するものと考えることができる。天井部と口縁部の境界は、鋭い稜をなす。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。器壁は全体に厚く、凹凸がめだたない。天井部外面は、口縁部との境界部分の直上まで逆時計回りのロクロによって回転ヘラケズリ調整する。

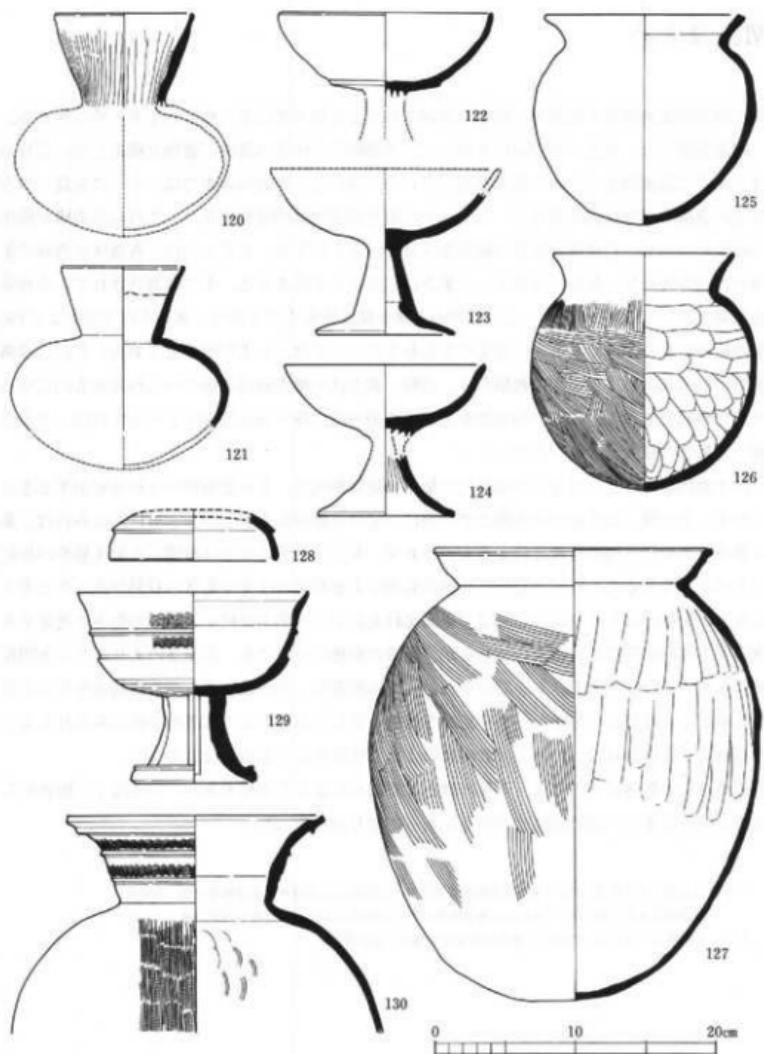


図30 古墳時代の土器実測図

VII. まとめ

今回の神並遺跡第3次調査の結果、推測されることからを以下に略記してまとめてかえる。

同調査区では、奈良—平安時代を中心に、古墳時代や中世の遺構、遺物を検出した。これらは、すでに試掘調査でその一部を確認していたとはいえ、今回の調査では、とくに奈良—平安時代の遺構の残存状態が良好で、いくつかの掘立柱建物跡が発見できた。これらの遺構が検出されなかったB、C地区が後世の削平をうけているとしても、おそらくは、A地区が当時の集落の西辺にあたり、集落は南北ないし東方に拡がると予想される。すでに調査されている神並遺跡第1次、2次調査区では、この時期の遺構が稀薄であることから、東西方向ではおよそ150mの範囲におさまるであろう。南北のひろがりについては、いまだ不確定である。ただ、遺構、遺物の出土状況および層相の観察から、当時、調査区の地表面は北西ないし西北西方向にゆるやかに傾斜しており、これが扇状地を流下する旧河道に落ち込んでゆくものとすれば、その方面への集落の拡大は考えられない。

出土遺物からみて、奈良・平安時代の集落の継続期間は、8世紀中頃から10世紀前半と考えられる。その後、12世紀代の遺物までの間に一定の差離がある。しかし、層位的にみれば、第6層がきわめて人為的な擾乱によるものであり、ちょくせつこの土に堆積した第4層が11世紀のものとみなせるため、10世紀代に比較的急激な土地利用の変容や集落の移動があったと考えられる。集落のはじまりについては、重圓文軒丸瓦などの出土資料から、この集落と近接する法通寺との同時期性がうかがい知れるが、集落の廃絶についても、法通寺のありかたと無関係ではなかつたはずである。しかしながら、建物の配置や、その他いくらかの時期差をもつとみられるピット群などの分布は、やや乱雜な様相を呈しており、この集落が官衙にみられるような計画的で管理された、たとえば倉庫群のような性格をもつものとは思えない。

古墳時代の集落については、今後の調査に委ねられるところが大きい。いっぽう、中世から現代にいたるまで、同調査区は耕作地であったことがわかった。

注1 奈良国立文化財研究所、「平城宮発掘調査報告Ⅸ」奈良国立文化財研究所学報第42巻、1985年。

奈良国立文化財研究所、「平城宮発掘調査報告Ⅹ」奈良国立文化財研究所学報第23巻、1974年。

注2 下村晴文「法通寺」財團法人東大阪市文化財協会、1985年。

図 版



1. 発掘前の調査地



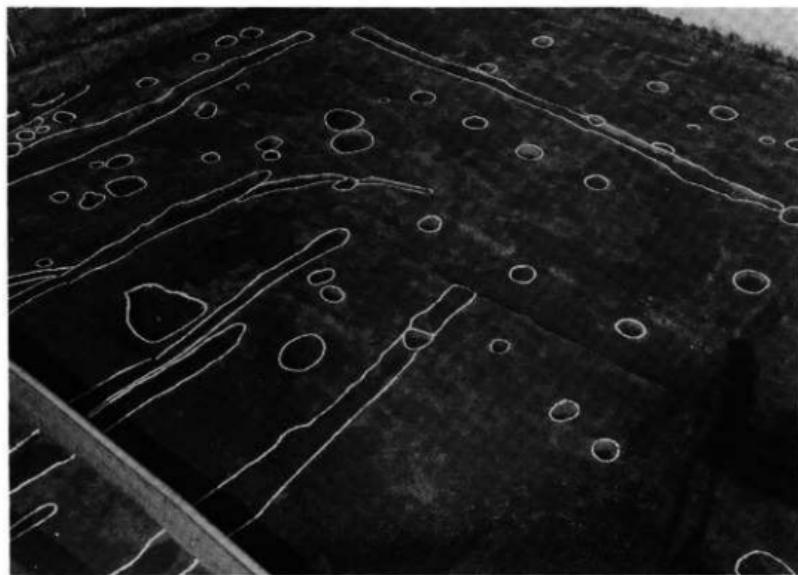
2. 近世井戸



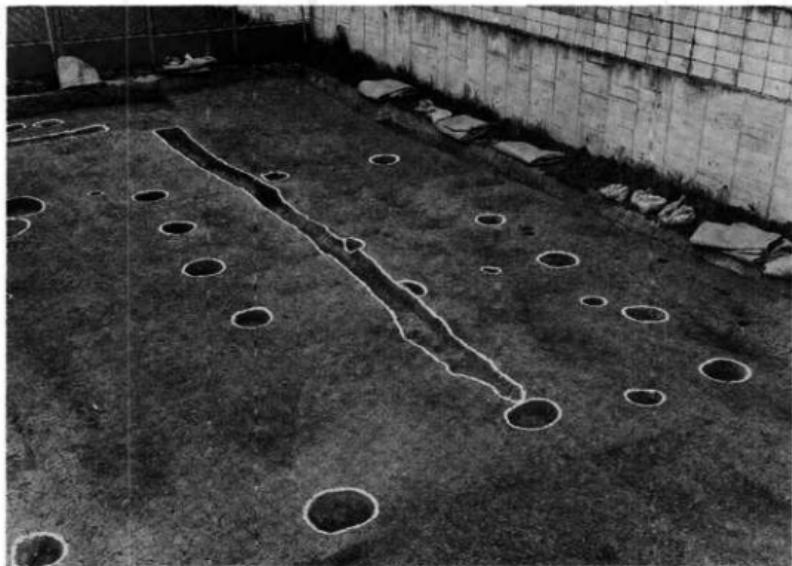
A地区造構全景



1. A地区柱穴、遺構群



2. A地区北半、遺構群



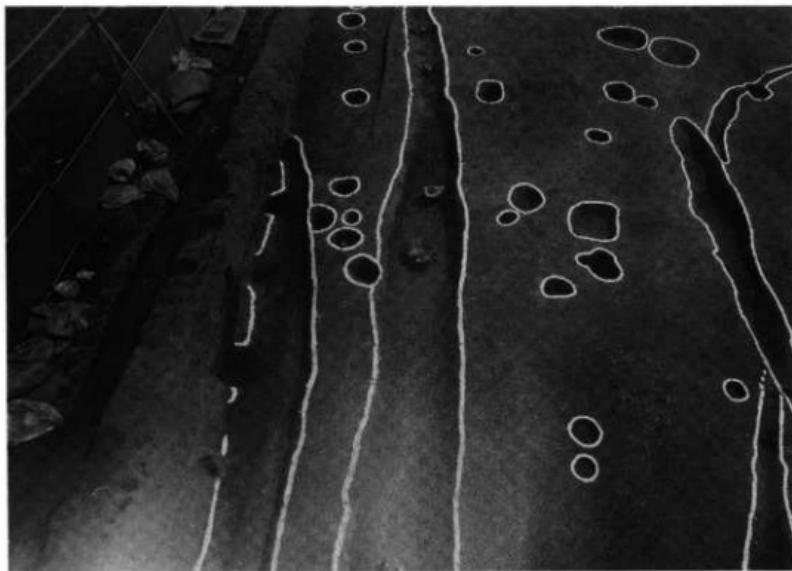
1. A地区古墳時代掘立柱建物 1



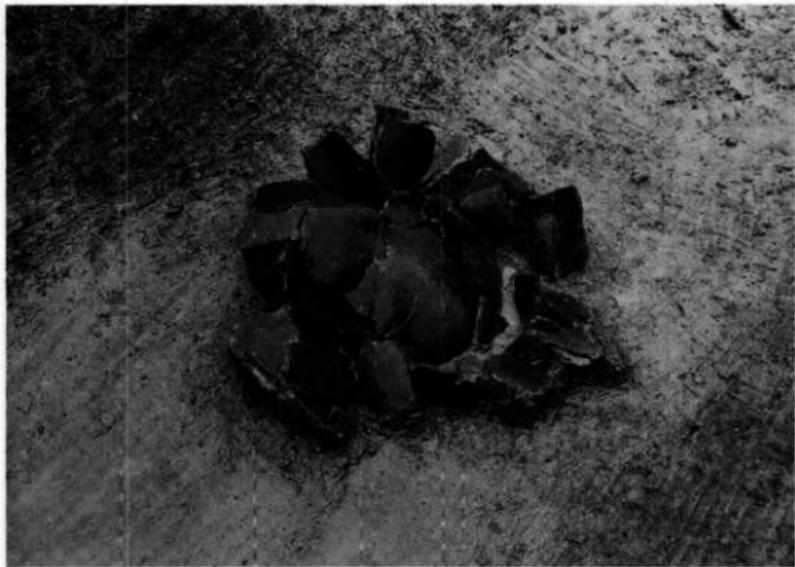
2. A地区古墳時代溝 2 遺物出土状況



1. A地区古墳時代、平安時代の溝、柱穴



2. A地区古墳時代、平安時代の溝、柱穴



1. A 地区古墳時代溝 2 遺物出土状況



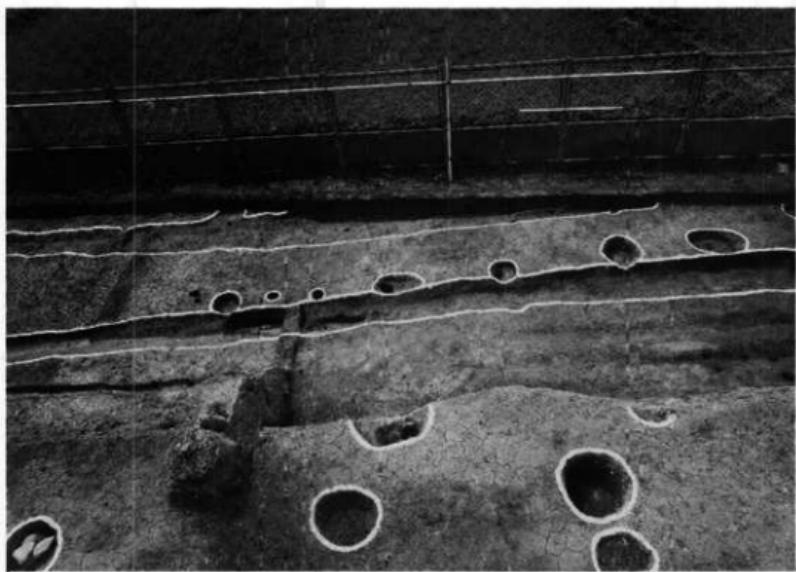
2. A 地区古墳時代溝 2 遺物出土状況



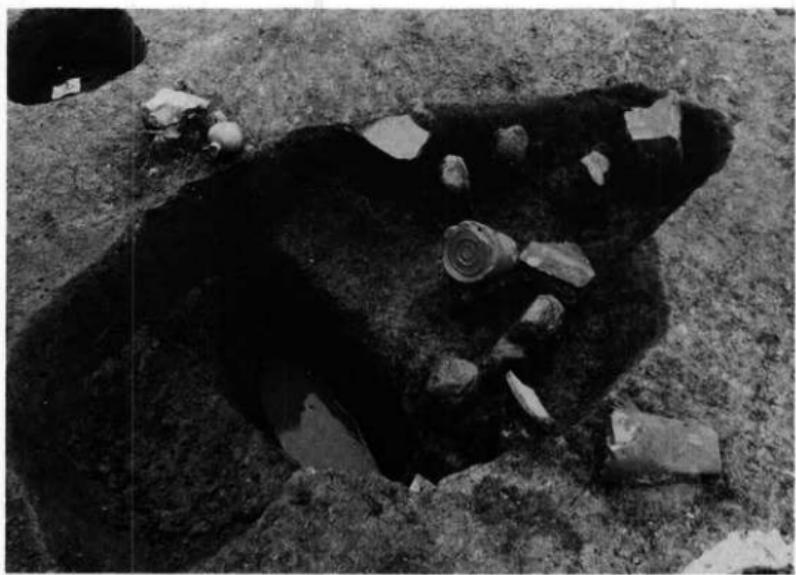
1. A地区南半遺構群



2. A地区据立柱建物 2、3



1. A地区南辺平安時代櫛 2



2. A地区ビット60、87遺物出土状況



1. A地区平安時代掘立柱建物5、柱穴3



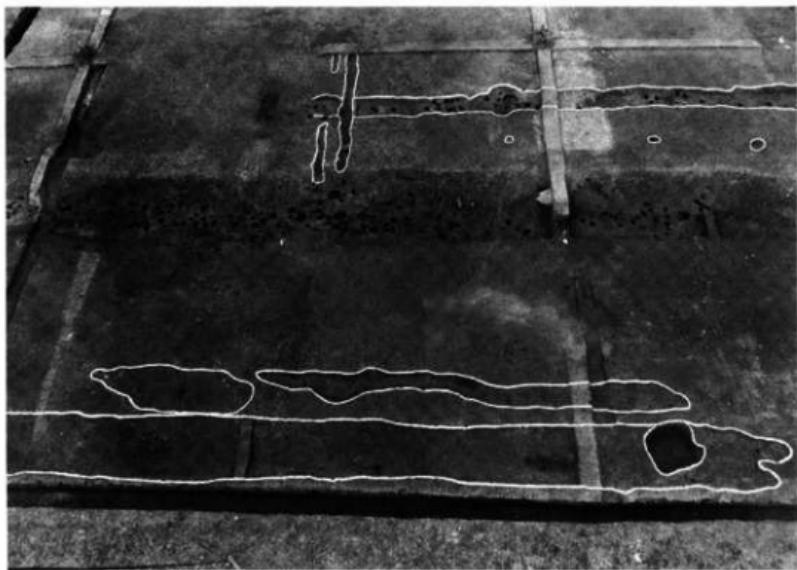
2. A地区平安時代掘立柱建物5、柱穴6



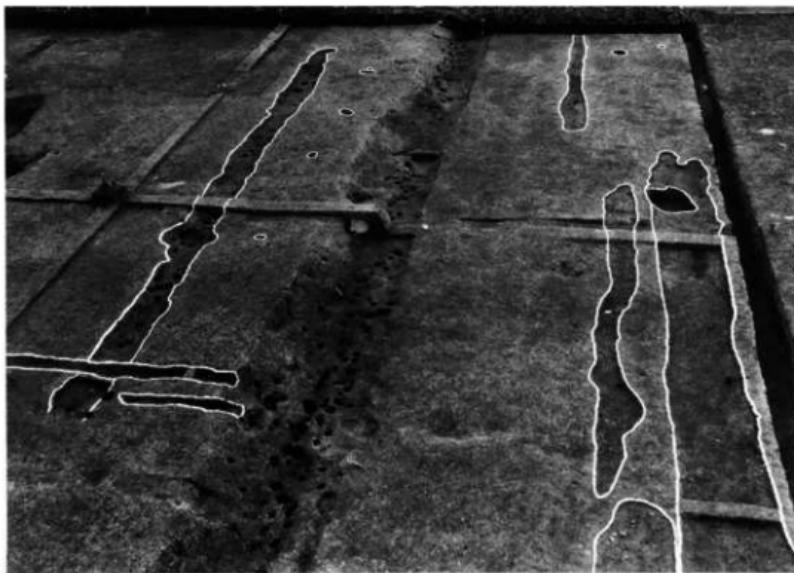
1. B 地区近世耕作地跡検出状況



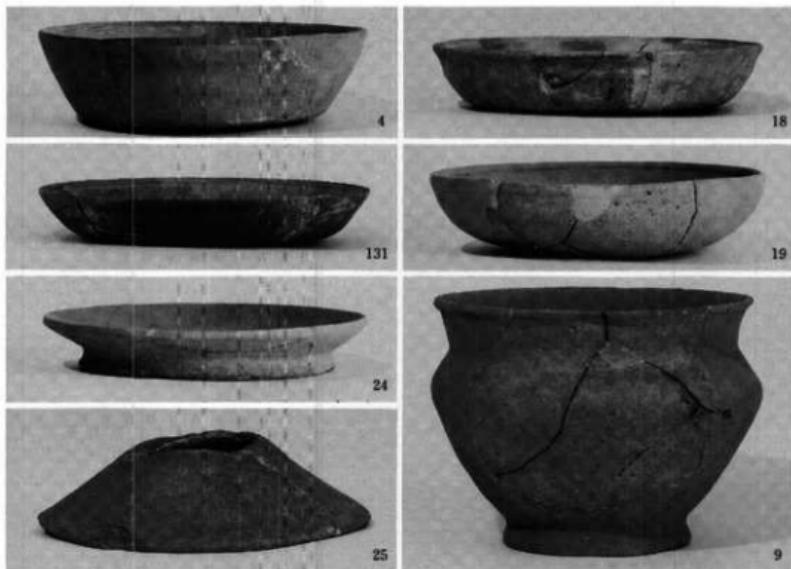
2. B 地区土塙検出状況



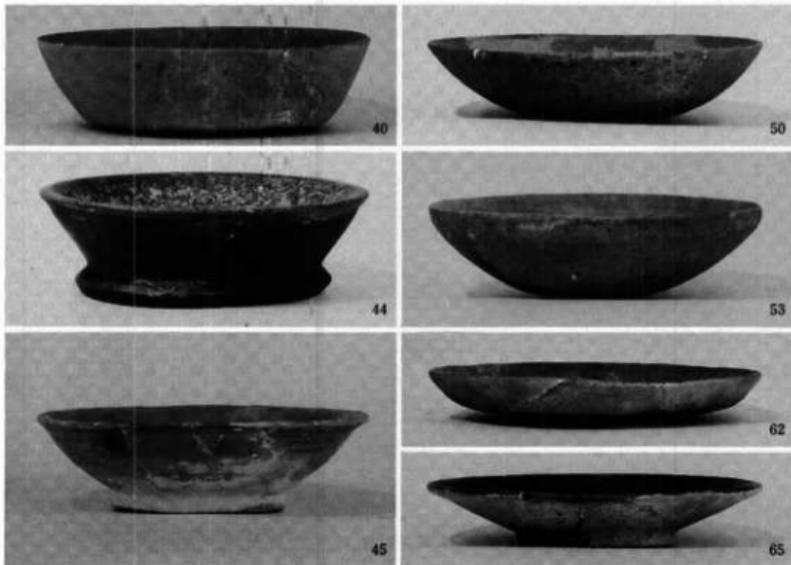
1. C地区近代、現代の溝、跡検出状況



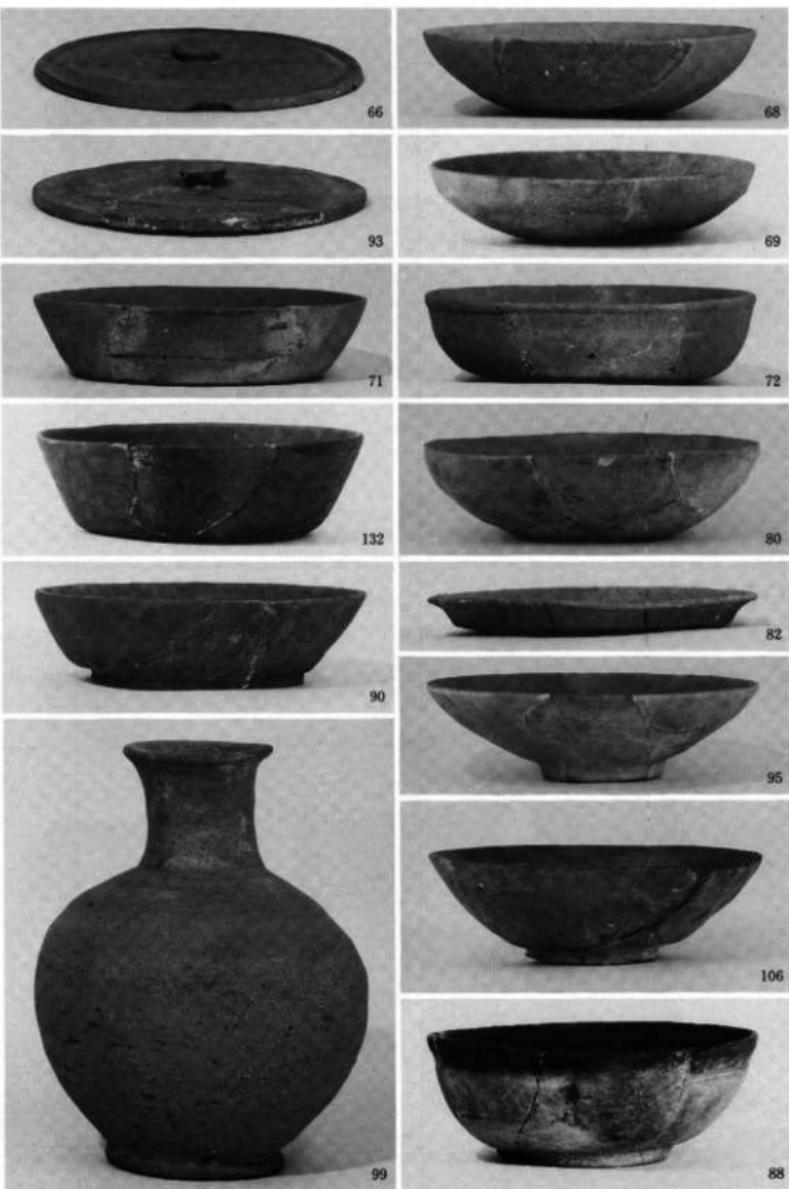
2. C地区近代、現代の溝、跡検出状況



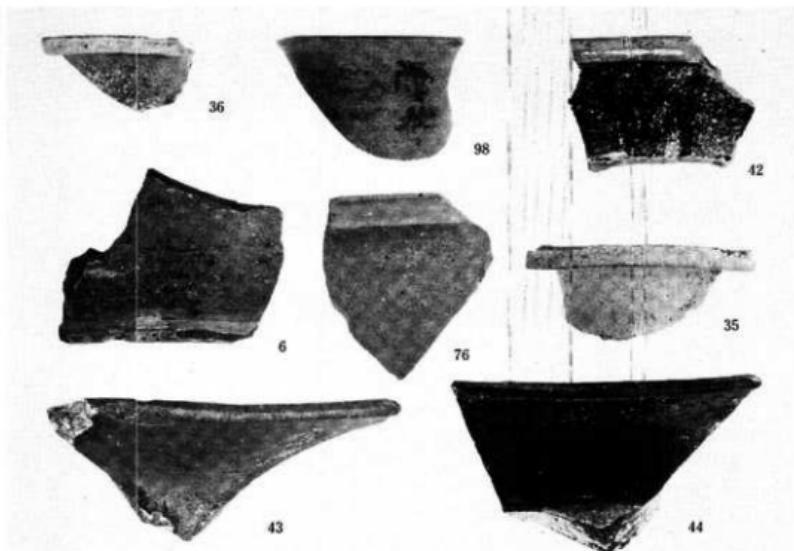
1. 第4層出土土器



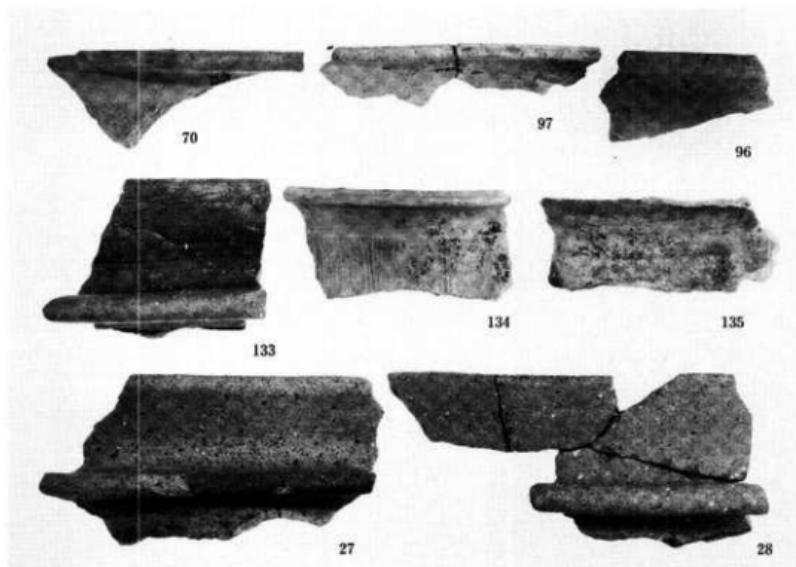
2. 第6層出土土器



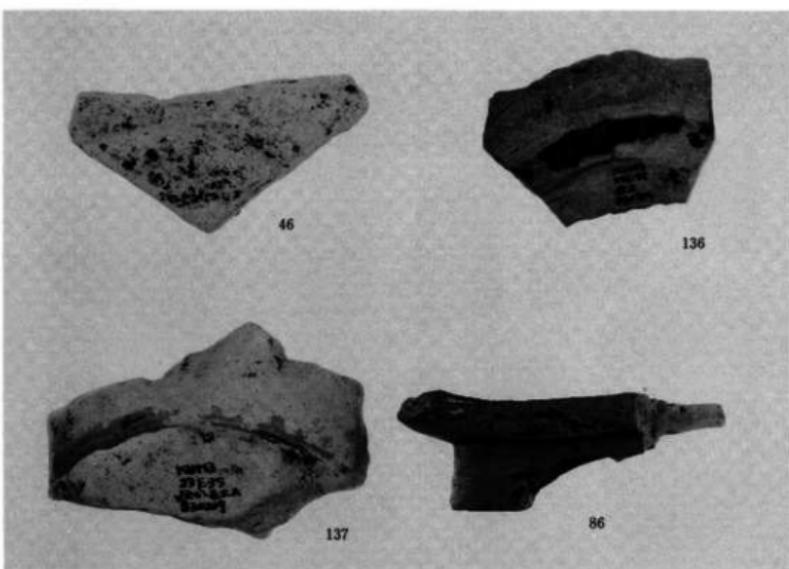
奈良・平安時代の造構出土土器



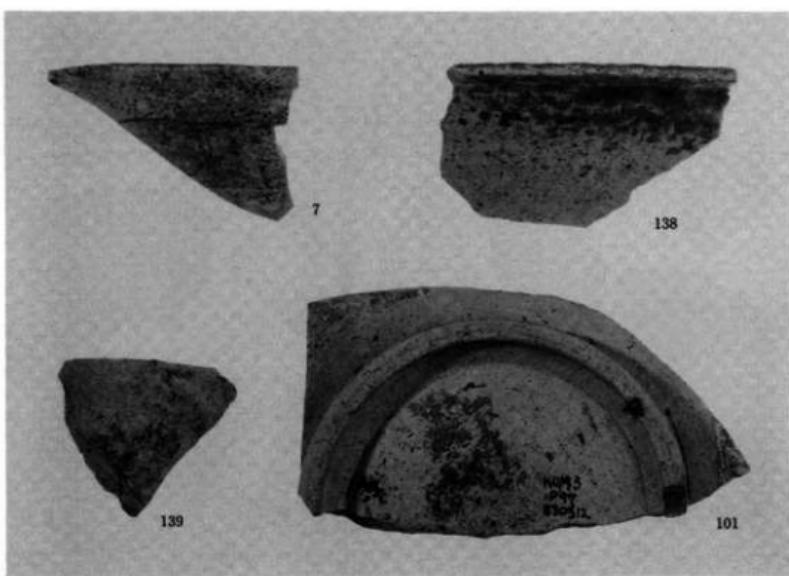
1. 奈良・平安時代の須恵器



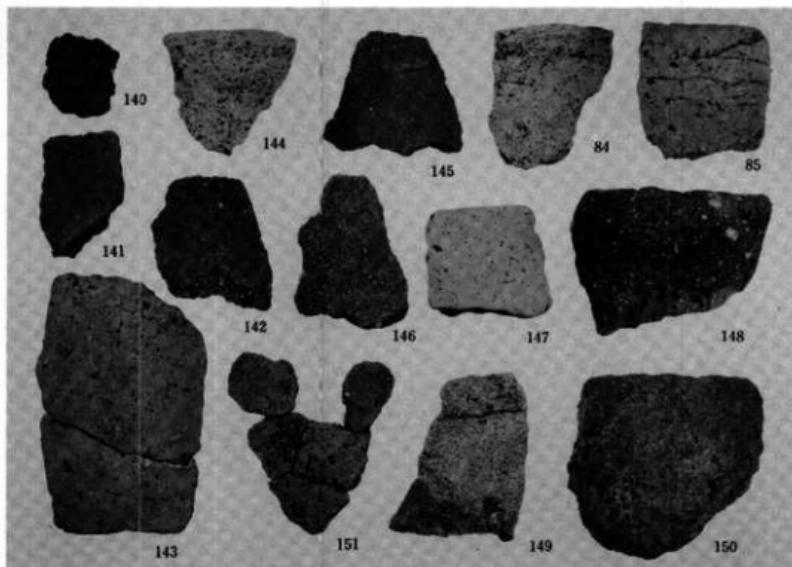
2. 奈良・平安時代の土師器



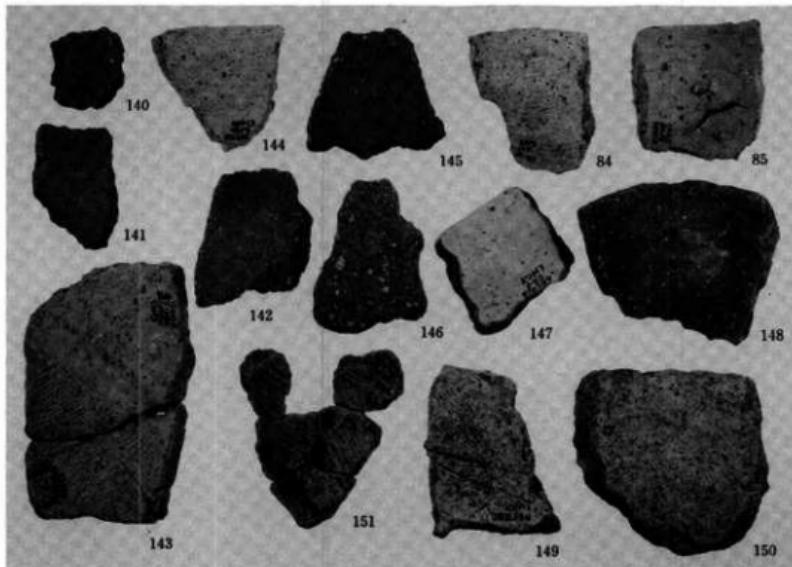
1. 綠釉陶器



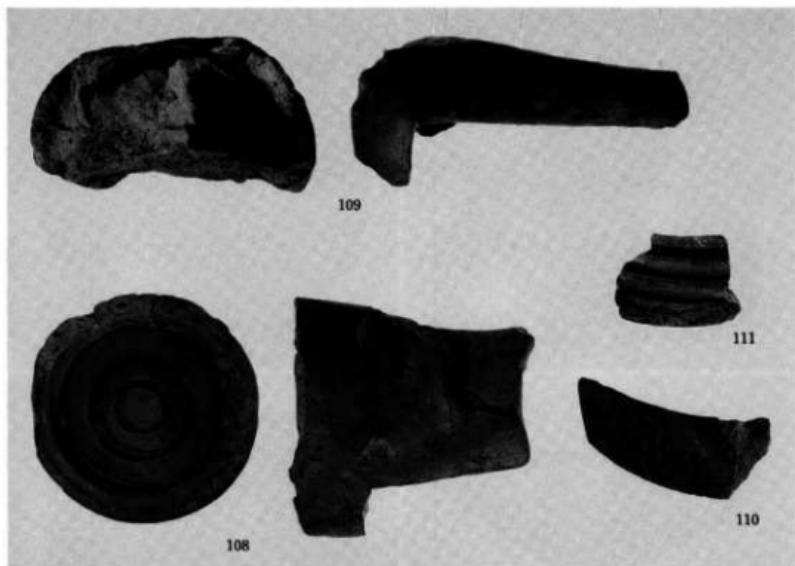
2. 灰釉陶器



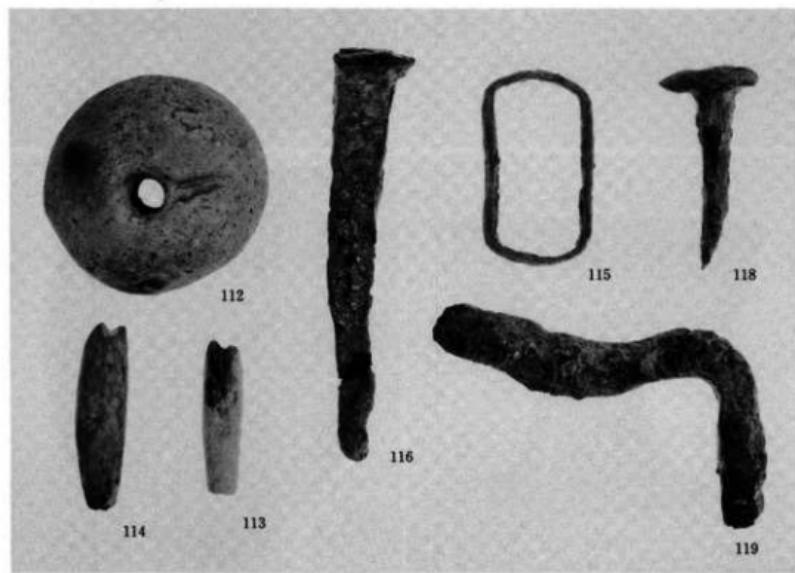
1. 製塙土器外面



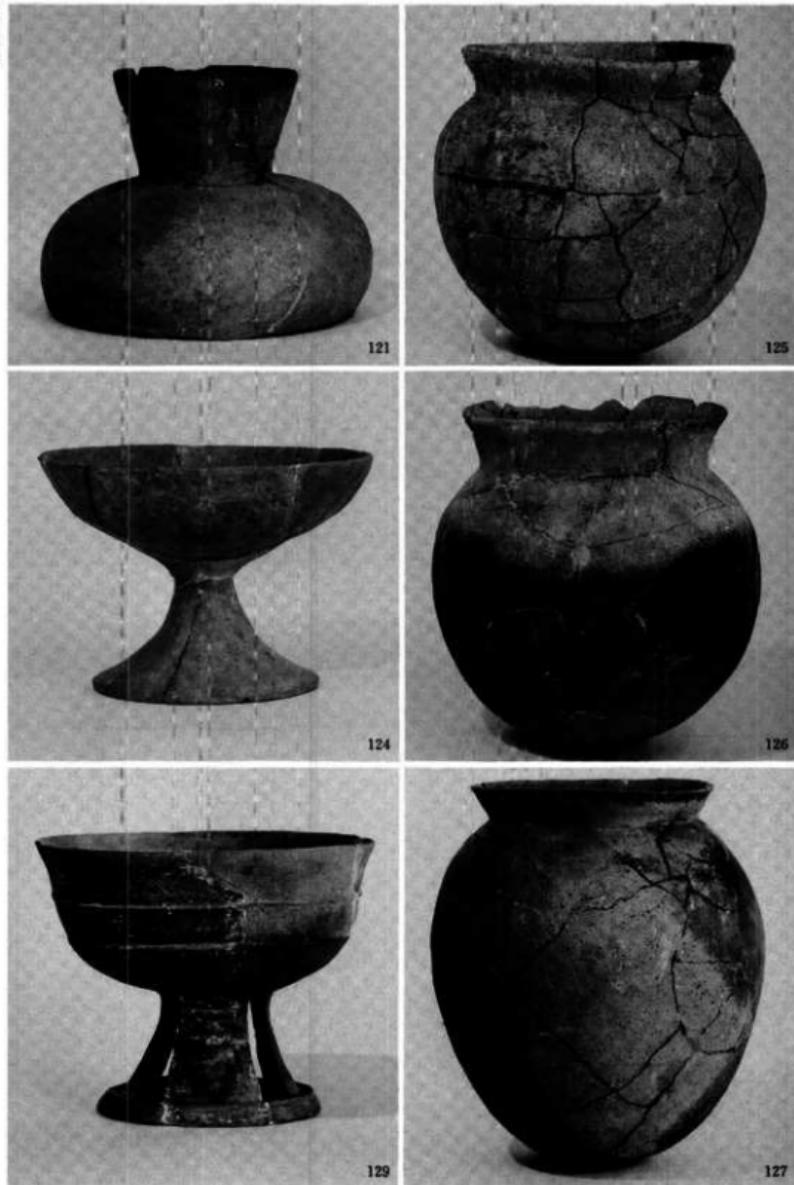
2. 製塙土器内面



1. 圖



2. 土製品・金屬製品



古墳時代の出土土器

神 並 遺 跡 III

1988年3月31日

発 行 東大阪市教育委員会
財團法人 東大阪市文化財協会
印 刷 ドウミ印刷 広研社